

再建主義ウォッチング掲示板 過去ログ

2005年7月15日(No.820)～2005年11月30日 (No.947)

米国のキリスト教新右翼思想である「キリスト教再建主義」(Reconstructionism, Dominion Theology, Kingdom Now Theory, Theonomy) に対して、真剣な憂慮を表明する立場に立つ人たちのための、情報交換・意見交換・問題提起のための掲示板です。なお、この掲示板の趣旨と関係がないと管理者が判断した書き込みについては、書き込んだ方への事前の承諾を求めずに、一方的かつ独断的に削除することがありますので、ご了承ください。

[再建主義ウォッチング掲示板 現行ログ](#)



947 それを言うなら

通りすがり 2 - 2005/11/30 14:54 -

あの一ですね、神学論点に関係ない人格攻撃は
山谷氏への富井氏のやり方を問題にすべきでは？
再建主義大論争の過去ログを見てみなさい。
「いっちゃってる」とか、罵詈雑言のオンパレードですよって。
私は単純に疑問に感じたからです。
これが人格攻撃なんですか、、、？？？



946 9 4 2 さん。論点がズレテマスヨ。

弁護 - 2005/11/30 12:51 -

初めに、私は再建主義神学に賛同している者ではありません。
富井さんは、語学が堪能な方です。収入は、翻訳で得ていらっしゃるようです。機械のマニュアルや、企業文書など、もしかしたら、私よりも高収入かも知れません。生活や、家族の有無まで持ち出して非難しているのは、人格攻撃であって、現在議論されている神学的諸問題に限定していただかないと、外野席から眺めれば、論争に負けそうなので、人格攻撃をしているのではないかと、勘繰ってしまいますよ。



945 なるほど

通りすがり 2 - 2005/11/30 12:20 -

実に面白いです。
この日本の罪意識はなるほどです。
でも山谷氏とルーク氏との関わりの中で
富井氏の真の姿が見えてきたことも、
再建主義の根本的問題が明らかになったことも
これは大きな収穫です。
もしこれらの論争がなかったら、
私も再建主義に関わったかもしれません。
富井氏の主張もそれなりにうなづける部分もあるので。

何だか危ないところにいたのだと、
今ははっきり分かります。
それにしても山谷氏の神学的・思想的問題をあぶりだす方法と
ルーク氏の人間性の問題をあぶりだす方法のコラボレーションは
とても見事だと感じています。
さらなる情報提供を期待しています。

□944 性的逸脱行為と自然法（2）

[山谷](#) - 2005/11/30 10:41 -

『延喜式』には、「大祓詞」（おおはらえののりと）が収められていますが、そこには禁忌すべき「天つ罪」（あまつつみ）と「国つ罪」（くにつつみ）が挙げられています。「天つ罪」は八つを数え、「国つ罪」は十三を数える、とされています。

「天つ罪」としては：

- （1）田の畦を壊して、田の水を干し、稲の生長を妨げること。
- （2）田に水を引くために設けた溝を埋め、田へ水が通わなくすること。
- （3）田に水を引くために設けた樋を壊し、田へ水が通わなくすること。
- （4）ある人が種を蒔いたところへ、別の人が重ねて種を蒔いて、作物の生長を妨害すること。
- （5）作物の収穫時に、所有権を示す札を他人の田畑に立て、それが自分のものであるとすることで、所有権の侵害をすること。
- （6）生きている馬の皮を剥ぐこと。
- （7）馬の皮を尻の方から剥ぐこと。
- （8）収穫祭の祭場に汚いものを撒き散らすこと。

「国つ罪」としては：

- （1）生きている人の肌に傷をつけること。
- （2）死んだ人の肌に傷をつけること。
- （3）肌の色が白くなるなど、治療できない病気になること。
- （4）瘤ができるなど、治療できない病気になること。
- （5）実母との相姦の罪
- （6）実子との相姦の罪
- （7）まずある女と相姦し、後にその女の子と相姦すること。
- （8）まずある女と相姦し、後にその女の母と相姦すること。
- （9）家畜を相手に性欲を満足させること。
- （10）地に這う虫（昆虫や蛇など）から蒙る病気や障害など、防ぎようのない有害な動物による災害。
- （11）雷による災難など、防ぎようのない天災地変災害。
- （12）空を飛ぶ鳥による被害など、防ぎようのない害鳥による被害。
- （13）家畜類を殺し、その血で悪神を祭り、人々を呪うまじないをすること。

上記の「大祓詞」は、今日もなお、日本各地の神社で神官によってささげられているものですから、日本列島の住人をもれなく「氏子」とみる神道理論からすれば、現代の日本人は、たとえキリスト教徒ではなくても、日本列島に住んでいるというだけで、「性的逸脱行為をしてはならない」という禁忌に規制されることになるわけです。

『古事記』と『日本書紀』では「国つ罪」について、馬婚（うまたはけ）、牛婚（うしたはけ）、鶏婚（とりたはけ）、犬婚（いぬたはけ）と、明細に述べています。これなどは、漠然

と述べている旧約の司法律法より、さらに具体的明瞭性を持っていますね。

このような、「自然法」による、性的逸脱行為の禁止規定・禁忌規定は、日本のみならず世界各地の異教徒にも見られるものです。つまり、再建主義者が言うように、「司法律法を否定すると、性的逸脱行為をやってもよいことになる」という論理展開には、決してならないわけです。

しかしまあ、富井さんなら、反論に日ユ同祖論を引き出して来て、「古事記・日本書紀・延喜式はいずれも、日本に渡来したユダヤ人が持ち込んだ旧約律法に根拠したものであり、その内容は聖書啓示と同一だ」ということぐらい、おっしゃるかもしれません（笑）

■943 性的逸脱行為と自然法（1）

[山谷](#) - 2005/11/30 10:35 -

再建主義に反対して自然法を肯定することが、どうして、性的逸脱行為をも肯定することになってしまうのか、富井氏の論理展開には、啞然とさせられてしまいます。

性的逸脱行為を禁忌したり禁止したりする宗教法や国法は、非ユダヤ教・非キリスト教世界にも、ごくあたりまえのこととして存在しています。なぜなら、それらは、「人の道」に反するものであり、人の道は、万人の良心に刻印されているものであり、それこそが、普遍法としての「自然法」であるからです。

おそらく、再建主義者の頭の中では、「自然法」が占めるべき場所が想定されていないために、「律法が禁止していないことは、やってもよいことだ」という単純論法に至り、結果として、「司法律法を否定すると、性的逸脱行為をなんでもやってもよいことになる」という答えになってしまうのでしょうか。

普通のキリスト者の場合、司法律法としての旧約律法の有効性は否定するものの、聖化の指針としての「第三用法の律法」は重んじるわけですから、「司法律法を否定すると、性的逸脱行為をなんでもやってよい」ということには、決してならないわけです。

そうしてまた、聖書啓示の光を受けていない異教徒であっても、「聖霊の照明としての一般恩恵」によって、その心に「自然法」が刻印されているわけですから、「異教徒だから、性的逸脱行為をなんでもやってよい」というふうには、決して考えないわけです。

異教徒に与えられた「自然法」の具体例として、わが国の『古事記』と『日本書紀』と『延喜式』（えんぎしき）を挙げることができます。『古事記』と『日本書紀』は、わが国の起源と成り立ちについて述べた神話的文書であり、『延喜式』は、神社で神官がささげる祝詞や儀式を集成したものです。

■942 こちらにも

通りすがり 2 - 2005/11/30 08:23 -

ついに獣姦の話まで、、、
この富井さん、毎日どんな暮らしをしているのか知らん。
結婚もしていないし、家庭もなさそう。
かといって、伝道もしていないし、牧会もしていないし、
もちろん仕事もしていない。
任務は神学の研究と発表だそうで、誰がお手当てをあげてるのか。
1日中、ネットをして、アチコチにけちをつけてる。
どう見てもまともな感じがしなくなってきました。

■ 941 T U L I P

山谷 - 2005/11/29 11:35 -

ウェスレアン・アルミニアン系神学校なら、必ず授業で学ぶのが、カルヴィニズムの五特質を表す「TULIP」です。

ウェスレアン・アルミニアンなのに、なぜ「TULIP」？と思われるかもしれませんが、神学的に対比される機会の多いウェスレアン・アルミニウス主義とカルヴァン主義との違いを端的に学ぶには、むしろ、カルヴィニズムの五特質をしっかりと頭に入れておいたほうが良いのです。

ところで、今回驚かされましたのは、カルヴィニズムの正統中の正統を自任する再建主義者が、「限定的墮罪」と「聖霊による一般恩恵」を主張している点です（！）

最初それを読みましたとき、「限定的贖罪」の書き間違いなのではないかと思ったのですが、どうやら、本当に「限定的墮罪」ということを、言っているようです。

そうしますと、再建主義においては、もはや、カルヴィニズムの五特質としての「TULIP」は固持されていない。むしろ、カルヴィニズムの五特質に重大な変更が行われている、と見るべきでありましょう。

通常、カルヴィニズムの五特質としての「TULIP」は、次のようなものです。

T = Total Depravity （全的墮罪）
U = Unconditional Election （無条件の選び）
L = Limited Atonement （限定的贖罪）
I = Irresistible Grace （不可抗的恩恵）
P = Perseverance of Saints （聖徒の堅忍）

上記の一番最初の"Total Depravity"（全的墮罪）を、再建主義は改変して、"Limited Depravity"（限定的墮罪）ということをするわけです。これでは、TULIPではなくて、LULIPになってしまいますね。

それだけでなく、なんと、再建主義者もまた、「聖霊による一般恩恵」ということを言うようです。もしそれが、非信者に対する、救いはしないが、秩序ある文化的・社会的生活を可能にさせる、聖霊の照明としての恩恵、ということを考えているのであればとしたら、これは、ウェスレアン・アルミニアンにおける「照明としての聖霊の一般恩恵」の概念と、何ら相違はないことになります。

図式としては、次のようになります：

カルヴァン主義 「全的墮罪」 + 「一般恩恵」 = 「理性能力」
ウェスレアン・アルミニアン 「全的墮罪」 + 「一般恩恵」 = 「理性能力」
再建主義 「限定的墮罪」 + 「一般恩恵」 = 「理性能力」

上記三つを比較しますと、カルヴァン主義とウェスレアン・アルミニアンは、墮罪の程度を、理性能力をも含めた全人格的・全存在的な墮罪と見ているのに対して、再建主義は、墮罪の範囲から理性能力を、かなりの程度除外している、ということになるようです。こうなりますと、再建主義とカルヴァン主義の距離よりも、小生のようなウェスレアン・アルミニアンとカルヴァン主義との距離が「より近い」ということになるようです。

なお、TULIPをLULIPに改変しても、「正統カルヴァン派」を自称することが出来るのですから、ウェスレアン・アルミニアンの小生が、次のような「新TULIP」を提唱し、かつ、「穏健力

ルヴァン派」を自称したとしても、それほど問題にならないのかもしれませんが（笑）

ウェスレアン・アルミニアンの五特質を表す「TULIP」とは、すなわち：

T = Total Depravity （全的墮罪）
U = Unmerited Election （功績によらない選び）
L = Limitless Atonement （無限定的贖罪）
I = Imputed Grace （注入された恩恵）
P = Perseverance in Sanctification （聖化における堅忍）

■939 論争後のくすぶり 通りすがり - 2005/11/27 16:33 -

ミレニアムにおいて再びLuke氏の発言がとりあげられ批判されています。発端はLuke氏のブログ・コメントにおいての再建主義批判を、第三者がミレニアムにメールにて通告し、それに対して掲示板にLuke氏の発言を引用しての批判の応酬です。

今回の発言では特にLeku氏への個人攻撃が際立っているように思えます。

それにしてもいちいちLuke氏の発言をミレニアムにメールで通告する人がいることは驚きです。

また、それを自分の掲示板にそのままコピー貼り付けして批判を応酬する態度にLuke氏もあきれています。

まだまだ、山谷氏とこの掲示板の存在意義は大きいように感じます。

■938 三位一体の神 ただのおじさん - 2005/11/26 19:51 -

クリスチャンが少ない日本の首相までが三位一体と叫んでいた今年。

再建主義の立場で言う神は三位一体なのだろうか。

三位一体の神にはそれぞれ違いがあり、そのことはクリスチャンたちがいろいろ考えてきたはずである。

しかし再建主義の主張を読めば読むほどに、他の立場のカルビン主義の人の意見や、再建主義とは比較的立場の近い再建主義とルーツを同じくするカイパー、ヴァン・ティルなどの影響を受けた人の主張を読むほどに（私も含む）、再建主義とは立場の近いはずのこのひとたちとの違いばかりが目につく。違和感が増大していく一方である。違和感はいくつもあるが、三位一体の件は後に述べるとして、何よりの違和感は政治に対する彼らのスタンスにある。地の塩、世の光、見張り人として、政治に加わること自体は私も個人的にやる分には別段否定はしない。しかし再建主義の場合、政治に積極的に関わらなければ不信仰と考えるので違和感を感じるのだ。人間が政治に積極的に関わらなければならないほど神様は政治には無関心とでも思っているのだろうか。政治にも歴史にも人間の営みには神様の摂理というのが計画というのが、常に関わっているのである。そのことを再建主義は認めていないようにしか考えようがない。このことも再建主義に私が違和感を感じる一因である。イエスが人間の形をとっておられた時、時のユダヤ人はローマからの解放、そしてイエス自身がそれを実際に成し遂げて地球上で王になることを望んでいた。12使徒と呼ばれた人たちですらそうであった。再建主義者はまさにイエスの時代のユダヤ人に非常によく似た存在であると言えよう。

そして三位一体に関する問題に移るが、イエスにどのような神としての役割があるのか、特に、イエスの十字架の意義が再建主義者の主張をどう読んでもはっきりとしないのがとても違和感がある。この点は、神の選びを信じる私としても、神の選びをはっきりと認めなかったクリスチャンがなぜいるのか、その理由を振り返り自己吟味すべきではないかと思わされる。少

し前に、再建主義者はまさにイエスの時代のユダヤ人に非常によく似た存在である、と言った。このことが私に、再建主義はイエスにどのような神としての役割を置いているのか、イエスの十字架の意義、というキリスト教の教え、福音の核心でイエスが果たしている役割を再建主義では説明し切れないのでイエスの存在意義が再建主義では明確ではないのではないのだろうか。そして聖霊の働きをも再建主義は明確にできていないというのは既に当掲示板でも触れていた点である。その上で神、神と言っても、実質的には再建主義の言う神は父なる神御一人なのであるとの疑念を出さざるを得ないのである。

私が立場上再建主義に近いのに再建主義にならないのはなぜかという当掲示板での発言を始めた理由という私自身の原点に戻れば、それは、カルバン主義の人が言う主張が時に強調されすぎたり、時に否定し過ぎたりした結果、カルバン主義の人が言う信仰の有り様と再建主義は大きくかけはなれたものとなってしまった。ので、ちょっとした長老派、改革派の主張ならばそれほど問題とはしない私が（時に私よりカルバン主義から遠い長老派・改革派（何派だ？）のクリスチャンもいるので）、再建主義は私と近い部分も少なからずあるのに全然賛同できないのは、彼らが本来の長老派、改革派とは異質な主張を読みとったからである。

話を戻して終わりにしますが、再建主義の人は本当に三位一体の神を理屈上肯定できるのでしょうか？ この質問の意義はクリスチャンなら誰でも分かるほど簡単明瞭です。この質問にノーと言え、肯定できる主張を展開出来なければ、明確に再建主義は異端だからです。

やれやれ。やっとこの問題にも自分なりの結論が出た。

JOGさん。お久しぶりです。

明日の日曜日は私の教会で特別集会が行われます。期待しています。

937 アルミニウス主義とカルヴァン主義

JOG - 2005/11/26 18:36 -

<http://www.aguro.jp/file/i/icdeml02sample.html>
より引用。

バーナード・ラムの指摘によれば、「（アルミニウス主義とカルヴァン主義）の両者とも、聖書に忠実であろうと欲していた事実は否定できない。両者ともにキリスト教会の主要な伝統を継承しようと望んでいた。...実は、”エヴァジェリカル”ということばは両者を包容しうるほど大きいものである。彼らは自己の見解を擁護することに急なあまり、彼らが共通に保持していたキリスト教信仰の偉大な中心的主張を忘れがちになった。その相違点は、実際には対立する両者が主張しあっていたほど大きくはなかったというのが実情ではなかろうか。」

936 初心者さんへ

JOG - 2005/11/25 22:17 -

再建主義の理屈によりますと、ミレニアムの姦淫の場でとらえられた女をイエス様が許した根拠として、

「申命記 17:6 ふたりの証人または三人の証人の証言によって、死刑に処さなければならない。ひとりの証言で死刑にしてはならない。 17:7 死刑に処するには、まず証人たちが手を下し、ついで、民がみな、手を下さなければならない。こうしてあなたがたのうちから悪を除き去りなさい。」

姦淫の女を訴えた人たちが、偽りの証人であった。こと、罪の無いものが最初に石を投げなさい。とイエス様が言われたのは、上記の御言葉に基づいて対処しなさいという意味だったと解説しています。

同様に、ダビデが死刑にならなかったのは、誰も訴える人がいなかったからという理屈になるかもしれません。

律法の役割とは、誰一人律法を完全に守れる人はいない。私たちには救い主が必要なんだという「養育係」の役割が第一の役割でしょう。

モーセですら、一夫一婦制をつらぬけていないのですから。

□935 間一髪之差も無い

JOG - 2005/11/25 21:12 -

救いに関してはアルミニアンもヘンリー・シーセンも間一髪之差も無いようですね。

ただ、ヘンリーシーセンは「聖徒の堅忍」の教理を持っています。これが無いのがアルミニアンでしょうね。

ただこれだけの違いのようですね。

シーセンは穏健カルビン主義と評されていますが、ただのおじさんさんの穏健カルビン主義と比べるとかなりアルミニウスよりの穏健カルビン主義といえるのでしょうか。

□934 ダビデの罪

初心者 - 2005/11/25 14:56 -

お尋ねします。再建主義神学によれば、姦淫と、殺人は死刑ですよ。にも係わらず、ダビデがバテシェバと姦淫を行って、しかも、ウリヤを殺したのに、死刑にならなかったのはどうしてでしょうか？

□933 蛇足

[山谷](#) - 2005/11/25 10:52 -

蛇足ながら申しますと、決定論的な「大脳」と、非決定論的な「量子」とが結びついて、人間の意識が生じる、という仮説を、量子力学者のペンローズが「マイクロチューブル理論」において開陳しています。

小生は、これは、「霊」という非決定論的要素と、「魂」という決定論的要素が結合して、人間の意志が機能するという、キリスト教神学にも応用できる、興味深い仮説だと思っています。

□931 決定論か非決定論か（2）

[山谷](#) - 2005/11/25 10:47 -

「決定論を受け入れない人間に知的営みをする資格がない」というヴァンティル弁証学の立場からすれば、ウェスレアン・アルミニアン主義者である小生には、このように「論じる」こと自体、まったく身分不相応なのですが、しかし、小生は、宇宙には「非決定論的要素」が存在していることを、確信しております。

それは、なぜいかにいうと、次のようになります。

（1）時空の連続体の内部においては「決定論」が支配しているとしても、時空の連続体を超えるものについては「非決定論」が支配している。

(2) ところで、聖書によれば、時空の連続体を超える「霊」については、「神」「天使」「人間の霊」の三種類を数えている。

(3) 問題は、人間が決定論的存在であるか、非決定論的存在であるか、ということであるが、聖書によれば、人間の構成要素は「体」と「魂」と「霊」であり、このうち、肉と魂は決定論的要素であるとしても、霊は非決定論的要素であると見ることができる。

(4) この「人間の霊」に、人間の意志の機能が置かれているとするなら、「決定論的な宇宙の内部における人間の非決定論的な自由意志」を考えることが可能になる。

(5) もちろん、厳密な意味での非決定論的な自由意志を持っていたのは、墮罪前の第一のアダムと、第二のアダムであるイエス・キリストと、この二人のみである。

(6) 墮罪後のアダムと、その子孫であるわたしたち人類の場合は、人間の三分構造のうちの「霊」が、聖霊との結びつきを失って死んでしまったゆえに、霊の能力が欠如し、このため、意志決定の機能はあっても、「魂」と「体」によって、意志が乗っ取られてしまっている状態にある。これが、人間の全的に墮罪した「奴隷状態」である。

(7) 「魂」と「体」は、決定論的要素であるのだから、「奴隷状態」に置かれた人間は、決定論的存在であるということが出来る。その意味では、神の選びがなければ、だれも救われることが出来ない。

(8) 神は、全的に墮罪した人間に対して、聖霊の働きにより、人間の「死んで機能停止した霊」の中に、神の霊の能力を、つまり、「非決定論的な霊の能力」を注入し、救いに関わる人間の意志決定を支援する。これが、回心に先立つ「先行的恩恵」(Prevenient Grace)であり、「注入された恩恵」(Imputed Grace)である。

(9) この、神の霊の支援によって、人間は、その霊の中にある意志決定の機能を用いて、救いを受け入れるか、救いを拒むかを、選ぶことが可能とされる。

以上が、ウェスレアン・アルミニアンとしての小生の考え方です。

さて、問題は、上記のような考え方を支持する引証聖句を見つけることができるかどうかです。次の聖句を検討すべきでしょう。

「御救いの喜びを再びわたしに味わわせ／自由の霊によって支えてください。」詩編51:14

「ここで言う主とは“霊”のことですが、主の霊のおられるところに自由があります。」コリント二3:17

☐ 930 決定論か非決定論か (1)

[山谷](#) - 2005/11/25 10:41 -

「決定論」か「非決定論」かという議論は、「恩恵」か「自然」かというアウグスティヌスV.S.ペラギウス以来の西方神学の呪縛から一歩も出ていないもののように思えますが、どうでしょう。

「恩恵」と「自然」の直接対峙を回避するために、中間領域としての「摂理」が設置されている・・・それが、「歴史」である、と小生は思うのです。

これは、「決定論」か「非決定論」か、という二項対立図式を回避するためにも、使えるのではないのでしょうか？ つまり：

「決定論」＋「摂理」＋「非決定論」＝「歴史」

・・・という三項図式になるわけです。

わたしたちは現在、時空の連続体、すなわち、「歴史」の内部を生きているわけですから、この「歴史」が終末において分解して、「決定論」へと収束するのか、「非決定論」へと収束するのかは、今の時点でのわたしたちには、認識不可能・了解不可能である、ということになります。それゆえ、聖書も、ある箇所を読めば、決定論的に書いてあり、また、別の箇所を読めば、非決定論的に書いてある、ということなのであります。

もちろん、何らかの手段で、わたしたちが「歴史」の外部へ抜け出る、つまり、時空の連続体の外へ出ることが可能であれば、認識し了解することが出来るかもしれません。これを言い換えれば、「天国」に行けば答えがわかる、ということでありましょう。

□ 929 質問の追加

JOG - 2005/11/25 08:09 -

穏健カルビニズムと「組織神学」前書きにて評されるシーセンは、「予定論」を展開しています。しかしそれは「人が福音を受け入れる」という神の「予知」に基づいて、福音を受け入れる人々を選ぶという意味での「選び」であり「予定」であるとされています。

また、
ヘンリー・シーセン「組織神学」より
「(570ページ末より)しかし、人間は救いを受け入れあるいは拒むことについて責任がある。」

と書かれているのは、「人間が福音の提示を拒否できる。」と意味は等しいと思います。

ただのおじさんさんの見解によると、シーセンはもはや穏健カルヴァン主義ではなく、アルミニアンだということになるのでしょうか？

ただのおじさんさんの「神の選びは認めるが予定論は全く認めない」というのはシーセンの立場と比べるとどのように違うのでしょうか？

もしも「人間は福音を受け入れるも、受け入れないも、拒否できない。神の側の選びによる。」という理解である「不可抗的恩恵」の教理はシーセンは「組織神学」の中で拒否しているのですが。

私はただのおじさんさんの理解に議論を挑んでいるのではなく、また、山谷さんにも議論を挑んでいるのではなく、ただ、シーセンとどのように違うのかということをお聞きできればと思っただけです。

□ 928 「拒否できる」という立場は間一髪ではなく大差 だけだのおじさん - 2005/11/25 00:42 -

穏健なカルビン主義で、神の選びは認めるが予定論は全く認めないただのおじさんとしては、「拒否できる」という立場は間一髪ではなく大差であります。

答えるべき質問はただ1つ。聖書は明確に「神の選びの確実な存在」を繰り返し主張しているのか、
あれこれ言わずに単刀直入にお答えください。聖書は明確に「神の選びの確実な存在」を繰り返し主張しているのですか？ そうではないのですか？
問題はこの1点です。どうなんですか？
単刀直入にお答えをお願いします。大抵のクリスチャンは神学をあれこれいじり回しません。ただ、聖書になんて書いてあるか、そのことを信じるだけだからです。

■927 続き

JOG - 2005/11/24 20:04 -

(43) 穏健なカルヴィニズムと間一髪就差しかないウェスレアン・アルミニアンニズム／カルヴァン主義メソジストのジョージ・ホウィットフィールドに対して、ジョン・ウェスレーが自己の立場を説明した言葉。ウェスレーによれば、「人間の自由意志は神の恩恵によって支えられているので、提供された救いを、注入された恩恵の助けを借りて、受け取ることが可能であるし、また、救いを拒否することも可能である」という。そして、この「拒否出来る」というただ一点においてウェスレアン・アルミニウス主義はカルヴァン主義と説を異にするという。これを「間一髪就差しかない」と呼ぶ。

ヘンリー・シーセン「組織神学」より

「(570ページ末より) しかし、人間は救いを受け入れあるいは拒むことについて責任がある。」

「(574ページより) 救いをもたらす神の恵みはすべての人に対して現われたのであるが、ある人々は、神の恵みをむなしく受けるにとどまっているのである。」

穏健カルビン主義といわれるシーセンはウェスレアン・アルミニアンと間一髪も差がないように思えます。

■926 ウェスレアン・アルミニアン主義と穏健カルビニズム

JOG - 2005/11/24 18:10 -

おひさしぶりです。以前の発言を反省し続けているJOGでございます。

さて、以前に山谷さまが「ウェスレアン・アルミニアン主義と穏健カルビニズムは紙一重である。」というようなことを書いておられましたが、もう少し具体的に教えていただけませんか？

「組織神学」ヘンリー・シーセンは穏健カルビニズムと同書前書きにて評されています。「予知に基づく予定」という立場で書かれており、先行的恵みによって救いを受け入れる人間の意思を論じています。これは「救いにおける神人協働を言うウェスレアン・アルミニアン神学」と同じなのではないでしょうか。

また、予知によって救いに予定された人に対しては「聖徒の堅忍」の教理が適応されています。

ウェスレアン・アルミニアン神学」では「聖徒の堅忍」の教理は否定されるのでしょうか？

■925 ヴァンティル弁証学について (続)

[山谷](#) - 2005/11/24 10:45 -

ヴァンティル弁証学を要するにこれは、「決定論を受け入れない人間には知的営みをする資格がない」ということになるのであります。

つまり、ウェスレアン・アルミニアン主義者である小生のように、「救いにおける自由意志＝宇宙における偶然性」を認める論者には、そもそも、「論じる」ということ自体の資格がない、ということになります（苦笑）

議論したければ、決定論という土俵（世界観的前提）に立て。そうでなければ、門前払いだ、というわけです。

そこで、決定論という土俵に立つとしますと、決定論には「機械的決定論」か「有神的決定論」か、二種類あるわけですから、そのどちらが真か、という、次の問題になって来るわけです。

ところで、機械的決定論と有神的決定論と、どちらが真であるかは、理性能力を用いて直接的に証明することは出来ないとされているわけですから、「機械的決定論に根拠した社会モデル」と「有神的決定論に根拠した社会モデル」と、二種類を用意して、どちらが社会として上手く機能するかを見て、その結果で真偽を判定すればよい、ということになります。

「機械的決定論」に根拠した社会モデルからは、人間の人格の自由が消滅してしまいます。最悪のケースが、全体主義と独裁政治です。

一方、「有神的決定論」に根拠した社会モデルであっても、その神が、イスラム教のような唯一神であったなら、やはり、人間の人格の自由が消滅してしまいます。

ところが、三位一体論に立つ有神的決定論であるなら、三位一体の「多様性と統一性」の中に「自由」の根拠を見出すことが出来るわけですから、聖書的キリスト教、すなわち、「三位一体論的決定論」に立つ場合にのみ、「自由かつ秩序ある社会モデル」が可能になる、ということになります。

ヴァンティルの弟子のシェーファーが、『理性からの逃走』や『それでは如何に生きるべきか』で展開した弁証法は、まさに上記のようなヴァンティル弁証学を応用したもの、とすることが出来るでしょう。

しかし、ここで、小生は疑問を持つのです。個々の信者の回心における神人協働を徹底排除して、決定論的世界観を保持しようとしても、アダムテストにおける「自由意志」を認めるのであれば、それは、宇宙に一点の「偶然」の要素が占めることを、認めることになるのではないかと？

非二契約論再建主義者が、契約神学におけるアダムの「業の契約」を、非聖書的な自律の侵入地点として問題視するのは、まさにこれでありましょう。

しかし、非二契約論再建主義者として、アダム契約を単純に「恵みの契約」にしてしまったところで、問題から逃れられることにはならないのです。アダムの自由意志における「偶然」の要素を完全排除してしまうと、完全に決定論的な世界となってしまいますから、「非聖書的な自律を廃して、神律の社会を再建する」という再建主義の目標が、そもそも意味をなさなくなってしまうのです。

それゆえ、非二契約論再建主義者が、墮罪前予定説から墮罪後予定説をも通り越して、「オープン・テイズム」（Open Theism）へと向かいつつあるのは、なるほど納得が行きます。

□924 ヴァンティル弁証学について

山谷 - 2005/11/23 16:28 -

今日、救世軍の音楽祭があったのですが、会場内に書店が出ていて、ヴァンティル著、松田一男訳『改革派キリスト教弁証論—Van Tilの弁証論』（聖恵授産所出版部）が販売されていました。在庫一掃セールとのことで、特価300円でしたので、迷わず購入しました。

今、斜め読みしているところですが、ヴァンティル弁証学の要点は、次のようなことだろうか、と考え始めています。

（１）救いにおける神人協働を言うウェスレアン・アルミニアン神学は、誤謬である。

（２）なぜなら、神が人間に救いを提供して、その救いを受け容れるか否かが、人間の気まぐれな意志にゆだねられているのだとしたら、救いは偶然性に支配されていることになるからである。

（３）ところで、主権者キリストは、御自分が創造した宇宙を摂理的に統治しておられるのだから、宇宙の内部には「偶然」は絶対に存在し得ない。

（４）もしウェスレアン・アルミニアン主義者が言うように、宇宙の内部に「偶然」が存在するのだとしたら、神は、もはや、神ではなくなってしまう。主権をもって万物を摂理的に統治することが出来ない神は、聖書の神ではないからである。

つまり、ウェスレアン・アルミニアンが弁証する「神」は、聖書の神ではない、ということになるわけです（！）なぜそうなるかということ、救いにおける人間の自由意志の余地を認めてしまうと、宇宙の内部における「偶然」の存在を認めることになってしまう、と捉えているからです。

さて、ここから先が、ヴァンティル弁証学の凄いところです。

キリスト者は、どうして、非キリスト者に、キリスト教を弁証することが出来るのだろうか？それは、次のような理由によります。

（１）非キリスト者は、その理性能力を用いて、理由付けをし、物事を説明し、思考して、文化を生み出し、学問を生み出し、文明を築いている。

（２）ところで、理由付けをし、説明をするためには、物事が「偶然」ではなく「必然」によって支配されているという「世界観的前提」が存在しなければならない。なぜなら、もし、万物が「偶然」によって生成しているに過ぎないのだとしたら、いったい、理由付けをしたり、説明をしたりすることは、不可能だからである。

（３）それゆえ、非キリスト者が理性能力を用いて、理由付けをしたり、説明をしたり、思考したりしたいのであれば、まず「世界観的前提」として、万物が「必然」によって支配されていることを、認めてかからなければならない。

（４）さて、宇宙が「必然」によって支配されている、すなわち、主権者キリストが万物を摂理的に統治している、という「世界観的前提」を提供することが出来るのは、数ある思想体系の中でも、唯一、聖書のキリスト教だけである。

（５）それゆえ、非キリスト者が、理性能力を用い、理由付けをし、説明をし、思考をし、学問的な営みをしたいのであれば、「世界観的前提」としての聖書のキリスト教を受け容れるしか、道はない。

つまり、「物事を説明できる」ということ自体が、主権者キリストによって摂理的に統治された宇宙の構造に根ざしているわけですから、非キリスト者が理性を用いて思考してキリスト教を否定することは、自分の髪の毛を自分でつかんで宙に浮かぼうとするようなものである、つまり、宇宙の構造を否定することである、とヴァンティルは言うわけです。

■923 前にここは紹介済みかな？

ただのおじさん - 2005/11/22 22:21 -

玉川上水キリスト教会掲示板

<http://www.hat.hi-ho.ne.jp/ists1970/bulletin.html>

ヴァン・ティルの話がよく出てくるのでたぶん紹介されているのだろうけれども、最近紹介されていたのを見ていないので改めて紹介します。

■922 バランスの取れた聖書の読み方こそ大事である ただのおじさん - 2005/11/22 20:57 -

私がこの掲示板に盛んに発言していた頃、このような問題に関わり合うのは程々にした方が良く教会の牧師に言われた。

それより、1人でも救われることを祈り、そのために奉仕することこそクリスチャンがすべきことだろうというニュアンスだった。

要は、明日に世が終わろうと、明日に何が起こるか分かっていようと、クリスチャンは今日すべきことを今日すべきなんだな。

終末論で信仰の姿勢が変わるなんて間違っているとこの掲示板で発言しはじめて感じたよ。

そういえば、私の牧師が宇田先生と会った時にこう言っていたというんだ。

聖書を教える者、終末論を語る（たぶん断言すべきではないということだろう。終末論の説明は自著でしているから）べきではない、と。

そう言った後、私の教会の牧師はこう付け加えた。なぜなら終末はまだきていない未来のことだから、本当に何が起こるかは神しか知らないことなんだ。それを人間が語って（断言して）良いのか。そんな資格は人間にはないのだと宇田先生も私の教会の牧師も言いたかったのだろう。そういうことを言われて見ると、再建主義は奇しくも宇田先生や私の教会の牧師が、なぜ、聖書を教える者は終末論を語るべきではないと言った発言の正当性を論証していることになる。もちろん、再建主義だけでなく、ディスペンセーション主義も行き過ぎがあるのも確か。バーナード・ラムはハイパー・ディスペンセーションイズムと言う言葉を使って批判していた（聖書解釈学概論）。

数年前に牧師の交替が私の教会にはあったわけだが、前の牧師先生から今の先生へ、一貫してたことは、聖書をよく読みなさい、きちんと読んで私的解釈を避けなさい、そしてラムの本に出てくるように、聖書解釈には原則があるのだからそれから逸脱しないように、そしてバランスの取れた聖書の読み方をするように、と、聖書に関するスタンスであったことは印象深い。

■921 TCUの先生取り合わないだろうね

ただのおじさん - 2005/11/22 20:44 -

私の教会の牧師なら名前の出たTCUの先生、みんな知っているんじゃないかな。

TCU出身じゃないけど、共立基督教研究所出身の先生だからね。この系列の本はたくさん牧師室の書棚にあったのを見たことがある。私も先生ほどじゃないけど信徒としては持っている方だけど、凄いと思ったな。

そういう経緯上、その先生が、私が再建主義に関して質問した時にどう答えたか。記録にはあまり取ってないけど大体覚えている。

結局、再建主義に限らず、このような性質の問題が出た時、その先生が口癖に近いくらい何度

も繰り返して言っていた台詞は、世界観の問題だから、世界観が違うから話は合わないんだ、という台詞である。ウォルターズの「キリスト者の世界観」は、私の教会に赴任していきなり青年、成人混合の読書会で使った位だから、たぶん、先生の答えはその辺にあると思う。世界観が違う（前提が違う？）から、と言って取り合わないだろうね。TCUの先生方ならたぶん。
もしTCUの先生中心で話合うならば、

<http://members.jcom.home.ne.jp/tamach/tci/maruchu.html>

<http://www.aguro.jp/file/r/reli13.htm>

この辺が答えじゃないかと思うな。上の丸山先生はTCUの先生として同僚だったわけだし、下は安黒先生の書いたアウトラインだからね。この線から大きな逸脱はないと思うな。私の教会の牧師もほぼ同じことを私に言ってたし。私も異論はなかったしね。私の教会は長老派でも改革派でもないが。15の法領域という言葉は牧師が信徒にさえ普通に使っているよ。私の教会、長老派でも改革派でもないのに変だね（笑）。

■920 おどろきました！

通りすがり2 - 2005/11/22 16:32 -

まず再建主義者のためにとりなしましょう、
との宣言、大変すばらしい。
ますます山谷さんの働きを支持します。

それにしましても、

>「教会の礼拝における呪いの務め」の回復の重要性を説いています。

とは驚きです。再建主義のリーダーがまず範を垂れている！？
富井さんの反対者に対する姿勢もこれで理解できます。
少なくとも主イエスの姿勢とはまったく逆なわけで、、、、
これでは人を判断する時に、＜敵か味方か＞の＜All xor Nothing＞（排他的OR）
に陥るのもなるほどです。

それに加えて

>プロミスキーパーズやジェームズ・ドブソンの「フォーカス・オン・ザ・ファミリー」など、日本の福音派で馴染み深い伝道団体が、再建主義関連団体として言及されています。

も驚きです。再建主義を表に表明しないでも
内実がそうである、あるいは影響下にある
ということなんだろうか？
ますますこのBBSの働きは重要になりますね。
情報提供の労を取って下さり、感謝です。

■919 祈るべき祝福は祈りましたので

[山谷](#) - 2005/11/22 14:40 -

祈るべき祝福は祈りましたから、言うべきことを言うことにいたします。

再建主義者の頭は混乱しています。

カルヴァンやウェストミンスター信仰告白が「司法律法は廃棄された」と明言しているのに、再建主義者は、司法律法を現代社会に適用しようと企て、それでいて、「再建主義に反対する者たちに足りないのは正統的でスタンダードな神学だ！」とおっしゃる。

これは、首尾一貫していません。

こういったどっちつかずの態度は止めて次のどちらかを採用すべきです。

(1) 司法律法を今も有効と述べ、同時に、カルヴァンとウェストミンスター信仰告白を尊重するのをやめて、徹底して、カルヴァンとウェストミンスター信仰告白を無効なものとして扱う。

(2) 司法律法を廃棄して、律法を新約時代に相応しいように用いる。すなわち、罪人の罪を暴露する第二用法の律法と、聖徒の聖化の指針としての第三用法の律法として用いる。

どちらかに決めていただきたいものです。

■918 再建主義者のために祈りましょう！

[山谷](#) - 2005/11/22 14:07 -

『クリスチャン新聞』2005年11月13日号（通巻第1859号）12面、聖契神学校校長・関野佑二氏の講演連載「米国キリスト教原理主義に見る、日本の福音派の課題 第6回」において、再建主義が取り扱われています。

関野氏は、再建主義に批判的立場に立つ栗林輝夫氏の『現代神学の最前線』（新教出版社）を参照しつつ、ラッシュドゥーニーやゲイリー・ノースの再建主義思潮を紹介しています。

ドミニオン神学を「統治主義」、王国現在論を「神の国の今の神学」として紹介していますが、プロミスキーパーズやジェームズ・ドブソンの「フォーカス・オン・ザ・ファミリー」など、日本の福音派で馴染み深い伝道団体が、再建主義関連団体として言及されています。

今後日本でも、再建主義思潮が福音派の中で論考されて行くことになるでしょう。その際はぜひ、次のメンバーで研究討論会が実現されることを期待いたします。

まず、ウェストミンスター神学校でラッシュドゥーニーやゲイリー・ノースの同僚であった経歴を持ち、日本の福音主義神学界においてヴァンティル弁証論を紹介しておられる、宇田進氏。

次に、シュリーア、バルト、クルマン、ベルコフ、ケアードというラインで中間時の中間領域における天使的国家権力論を熟知しておられる、組織神学者の倉沢正則氏。

さらに、フランシス・A・シェーファアの『それでは如何に生きるべきか』を翻訳して日本に紹介され、かつ、北米の再建主義という解答には行かずに、オランダのカイパーの一般恩恵論に解答を見いだされた、キリスト教哲学者の稲垣久和氏。

これら三氏はいずれも東京キリスト教大学で要職にあるわけですが、「神律」か「人律」か、「神本主義」か「人本主義」か、という二項対立図式的な思考方法については、東京キリスト教大学では耳慣れたパラダイムであると思いますので、シンポジウム会場として同大学が最適でありましょう。

シンポジウムの進行役としては、宇田氏の高弟であり、ミラード・J・エリクソンの『キリスト

教神学』の訳者である、一宮基督教研究所の安黒務氏が最適任と思います。

小生としては今後は、再建主義者のために、呪いではなく、祝福を祈る、「とりなしの祈りのつとめ」を果たして行きたいと思います。

再建主義の論客デイヴィッド・チルトンは、その著『復樂園—聖書全体の読解から導き出された聖書的終末論への入門書—』において、「教会の礼拝における呪いの務め」の回復の重要性を説いています。すなわち、「教会の役員は裁きをもたらす権能を神から付与されているからです。教会は神の敵に対する裁きを求める<呪いの詩篇>を歌ったり祈ったりする正統的な慣習に戻るべきなのです。教会の役員は迫害者に宣告を下すべきであり、信徒はそれに続いて迫害者が悔い改めるか、もしくは滅ぼされるように忠実な祈りを捧げなければなりません」と言うのです (pp.148-149)。

ところで、わたしたちが、再建主義に反対し、現代の統治システムへの「呪いの律法」の適用に反対し、むしろ、聖霊に満たされることにより、十戒の二枚の板が要求する「神への愛」と「隣人への愛」を、恵みにより生きることが出来る、と信じているのであれば、わたしたちは当然の帰結として、「再建主義者を呪ってはならない」のです。

主イエスが「呪うのではなく、祝福しなさい」と勧めておられるのですから、わたしたちは主に倣い、わたしたちの論敵である再建主義者のために、祝福を祈ることにしようではありませんか！

そうでないと、わたしたちは、チルトンが導きだした結論と同じ道を進むことになってしまい、再建主義者と同じ実を結ぶことになってしまうのです。

再建主義の間違ひは、どこまでも間違ひであることを、わたしたちは頑迷なまでに指摘し続け、同じことを千万遍繰返し言うべきですが、それと同じぐらい熱心に、再建主義者のために祝福を祈りたいと思うのです。

917 霊と肉

通りすがり 2 - 2005/11/20 23:43 -

富井さんは完全に独り芝居モードにお入りですね。
日本にイスラエル人が来ていたことを論証するのに
「来ていなかったこと」を聖書から論じると、、、
とととと、そんなことは聖書には書いてないでしょうに。

この方の論理は、山谷さんも指摘する<肉に従うこと>と
<御霊に従うこと>の違いを理解していない。
<霊と肉→グノーシス>と言う思考回路ができてしまってます。

自分を中心にするなど言いつつ、あくまでも自分が中心で、
自分を援助する人には100倍の祝福があると、
自分に唾をかけるものには神の呪いがあると、
なぜなら自分の思想は自分から出たものではなく、
神が時々啓示されたもので、よって自分のHPを
理解するには御霊の照明が必要だと、、、
彼の頭は<自分vs自分を認めない他者>の構図だけ。
どうみてもどこか病んでおられます。

素朴な疑問ですが、誰が彼に毎月のお手当てを、、、？

☐916 憐れみを

通りすがり 2 - 2005/11/20 11:02 -

富井さんは病んでおられます。
批判よりも憐れみを、、、

☐915 初めての人が・・・

HN - 2005/11/20 01:32 -

初めて触れるキリスト教が再建主義だとしたら、日本で信徒になる者は、まずいないでしょうね。またヨーロッパ諸国では絶対に普及しないと思います。そんな気分じゃないもの。

☐914 再建主義って何？

ただのおじさん - 2005/11/20 00:16 -

異端？
カルト？
教会がカルト化するとかいう本があった気がするけどそれに該当するのかな？

☐911 軽々しく裁きや呪いを口にするべきではない

HN - 2005/11/19 23:35 -

牧師に唾をかけて出て行くような人間は祝福されない2

↑

これだが、背後の事情は私には全くわからない。
そんな第三者がこれを読むと、不愉快な気分になる。
富井氏は、人々に対して裁きや呪いを軽々しく口にするが、それが口癖のようにになっているのであろう。

退会者を呪うようなことをやるのは、迷信的な新興宗教の常套手段である。彼らは「辞める」という人に対して「辞めたら、あなたは交通事故に遭って死ぬかもしれない」などと平気で言う。

それと同じレベルに聞こえるんですね、富井氏の発言は。

再建主義で、悪い口癖が身に付いたのだろう。

彼は、クリスチャンに対して今までに何度「地獄行き」を宣言したことか。

この態度は絶対に間違っているし、それこそ逆に裁かれるべき高慢であると思うのである。

☐910 牧師に唾をかけて出て行くような人間は祝福されない2

HN - 2005/11/19 23:16 -

牧師に唾をかけて出て行くような人間は祝福されない2

↑

ミレニアムの新着情報にこのような記事が書かれてありましたが、富井さん、最近何かあったのかな？何か非常に怒っているみたい。弟子の反乱でもあったのか・・・。

909 聖霊と律法と自然法（2）

[山谷](#) - 2005/11/15 18:04 -

むしろ小生は、次のように考えます。

聖霊に満たされたキリスト者は、十戒の二枚の板が要求する「神への愛」と「隣人への愛」を生きることができれば、それで十分なのです。もちろん、キリスト者が社会と政治に無関心であってよいわけではなく、また、自然法によって統治する世俗的国家が、無慈悲な国家であってよいわけではありません。

キリスト者の社会活動・政治活動を通して、社会と国家にキリスト教的価値観が浸透することにより、キリストの律法が命じる「強い者は弱い者の弱さを担うべきである」（ローマ15:1）という原則を、世俗的国家が最大限取り入れるようにすべきでありましょう。ここに、「御国の建設」としてのキリスト者の社会活動・政治活動の意義があります。これを、「小さき者たちの王国」と言い換えることも可能でありましょう。

自然法によって統治する世俗的国家が、キリストの律法が命じる「強い者は弱い者の弱さを担うべきである」という原則を採用した場合、その社会は、「リバータリアニズム」が思い描く社会とは、大きく異なるものとなるでしょう。これを仮に「ローマ15:1国家」と命名することにしましょう。

ヴァンティル弁証学が、弁証学として有効性を発揮するとしたら、このような「ローマ15:1国家」と「リバータリアニズム国家」との社会機能比較をする場合でありましょう。

ところが、「再建主義国家」と「リバータリアニズム国家」との社会機能比較をする場合だと、両者の内容は同一なのですから、聖書の真正性が証明されると同時に進化論・社会ダーウィニズムの真正性までもが証明されてしまうことになるのです。あるいは逆に、進化論・社会ダーウィニズムの真正性が否定されると、聖書の真正性も同時に否定されることになってしまうのです。

908 聖霊と律法と自然法（1）

[山谷](#) - 2005/11/15 17:54 -

聖霊と律法の関係について、小生は、次のように考えます。

「聖霊と律法と自然法は一致している。
それゆえ、聖霊に満たされたキリスト者は
十戒の二枚の板が要求する『神への愛』と『隣人への愛』を
生きることができるようになる。
なお、国家は、自然法によって統治すれば、それでよい。」

これに対して、再建主義者の考えは、次のようなものであらうと思います。

「聖霊と律法は一致している。しかし、自然法は悪魔的である。
それゆえ、聖霊に満たされたキリスト者は、
十戒の二枚の板が要求する『神への愛』と『隣人への愛』を
生きるだけでは不十分であり、
司法律法によって統治する国家を樹立しなければならない。」

上記の「司法律法によって統治する国家」とは、単に、律法違反者を公開処刑する国家というだけにとどまりません。

再建主義の最終目標は、公開処刑制度よりむしろ、現代の国家が成文法で規定している統治シ

システムを廃止して、「律法に書かれていないことはすべて自由化する」ことにあります。

これは、公教育・公立病院・公的福祉・公的年金の廃止、所得税・消費税・相続税・法人税など「非聖書の税制」の廃止、さらには、反トラスト法・独占禁止法・環境保護法・食品添加物規制法といった経済規制撤廃による「経済の完全自由化」（レッセフェール）を目指す、ということにほかなりません。

つまり、再建主義の聖霊理解であると、聖霊に満たされたキリスト者は必ず「リバータリアン」にならなければならない、ということになります。

小生は、これは、大いなる誤りである、と考えます。

☐ 907 再建主義の御国建設

通りすがり 2 - 2005/11/14 14:59 -

なんだかなあ～、統一教会の地上天国の建設みたいな、、
 聖霊の働きがないのはルーク氏も指摘されてましたが、
 聖霊の働きなしでできる「御国」はどんなものか、、？
 少なくとも富井氏の作る国だけには住みたくないが、、笑

☐ 906 再建主義の聖霊論

ただのおじさん - 2005/11/12 20:09 -

再建主義にとって聖霊はどんな働きをするのかなあ？
 父なる神の働きは強調されているけど、キリストの働きも聖霊の働きも同程度に強調されなければバランスが悪いな。キリスト教の神は三位一体の神なんだからさあ。

☐ 905 やっぱ人間がこの地球上に御国を建設しなければいけないんだ

HB - 2005/11/12 18:42 -

メルマガ「Millennium news letter」より

>>神は世界を創造され、人間にその支配を委ねられた。
 だから、人間は、神の創造の完成者として立てられた。
 それゆえ、神の国建設は人間の中心的な使命である。
 「御国が来ますように。御心が天で行われるように、地上でも行われますように。」との祈りは、「日用の糧を毎日与えてください。」との祈りに先行している。
 自分の必要よりも、神の御国を第一に求めよ、ということである。
 自分のことを優先しては、御国など作れない。
 御国が人間にとって中心的な使命なので、自分の人生の決算日には、「どれだけ御国建設に貢献したか。」によって評価が下る。
 人間が人格的被造物である以上、人生全体が評価の対象である。
 我々は、仕事をするために生まれてくる。
 人生全体が仕事である。
 ヒューマニズムに騙された人々は、「人生でどれだけ楽しめるか？」が問題だ、と言うが、我々にとって本当の、中心的テーマは、「人生でどれだけ御国を建設できるか？」である。>>

再建主義はもっと聖霊による自分の内なる御国建設しないと行き詰るでしょうなあ。自分の内なるものと外なるもののバランス、これが難しいんですよ。

■904 フランスにおけるカルト（2）

山谷 - 2005/11/11 17:31 -

ヨーロッパでは、破壊的カルトの活動が80年台より社会問題化し、まずヨーロッパ共同体でカルト対策が着手され、これに倣い、フランス政府が1996年に国内調査を実施して、その結果に基づき、次のような「破壊的カルト」の基準を明らかにしました。

- （1）悪質なマインドコントロールを用いて会員を精神的肉体的に破壊する。
- （2）会員の人格、人間関係、社会生活、家庭を破壊する。
- （3）子どもを虐待する。
- （4）情報操作、情報遮断により、知的・道徳的・金銭的詐欺を行う。

上記四項目が「事件」として露骨に発現した場合（傷害、拉致監禁、児童虐待、詐欺など）、「国家」は「破壊的カルト」に認定した団体を、強制的に解散させることができます。これは、日本の破壊活動防止法に類する、相当強力な「剣」です。上記四項目が「事件」として発現しない場合であっても、濃厚な疑惑があると報告される場合には、監視団体に指定することによって、当該団体の反社会的行為を抑制し、かつ、当該団体が路線を修正するよう促します。

強力な「剣」は、鞘に収めて置いておくだけで、十分にその効果を発揮します。ですので、フランス政府が実際にこの「剣」を抜いて用いる場面は、日本の公安が破壊活動防止法を実際には適用しないのと似て、そう簡単には訪れないであろうと思われます。

フランスのカルト防止法では、フランスで布教活動を行っている日本のいくつかの宗教団体が、指定監視団体となっているようです。

なお、救世軍では、礼拝説教に続いて、「恵の座」への招きを行います。これは、キリストを信じる決心をするよう聴衆に促し、求める者は、説教壇の前に設けられたベンチにひざまづいて回心の祈りをささげるよう、アピールする、救世軍が130年以上続けてきた方法です。

カトリックの神学者には、この「恵の座」を催眠術であるとして批判する人が存在します。しかし、カルト防止法が施行された年と前後して、救世軍はプロテスタント教会として史上初めて「宗教団体」（コングレガシオン）として、政府から法人格を認可されました。これまで「宗教団体」に認定されていたのはカトリック関係団体に限られていましたから、当時フランスでかなり話題となったようです。

フランスは人口の9割がカトリックで、1000年以上、司教区によっては2000年近くの歴史を保っているわけですから、新興の福音派が社会から信頼を獲得するまでには、地道な活動を100年以上続ける必要があるでしょう。その間、なかなか信頼が得られないという伝道上の悩みが多々あるかもしれません。しかし、これは、いたしかたないことではないでしょうか？ 水の上にパンをまく働きであるかもしれませんが、100年、200年、300年と続けて行く以外に、社会の信頼を勝ち取る方法はないだろうと思います。

もちろん、自分たちが教会として、悪質なマインドコントロールを用いない、会員の社会生活を破壊しない、子どもを虐待しない、情報操作や情報遮断を行わない、無償労働や多額の献金を強要しない、といった「宗教としてあたりまえのこと」をきちんと守っているのであれば、いかに国家権力といえども、無実の罪で宗教団体を弾圧することは不可能なのですから（まさにそのために、憲法と国家の公法が存在するのですから）、説教後の招きなども、萎縮せずに、それぞれの教会が確信を持って堂々に行えばよいと思います。もし、説教後の招きをして起訴されるようなことでもあれば、「国家」と「社会」と「教会」から独立した「裁判所」の法廷で、自己の確信に立って、堂々と戦いましょう！

■903 フランスにおけるカルト（1）

山谷 - 2005/11/11 17:26 -

ナチスのように、国家が悪鬼化する事態がある一方、社会が悪鬼化する事態もあります。これは、中間時の中間領域において、国家の絶対主権と社会の分散主権を頭首権者キリストから委任されている主体が、いずれも、潜在的に悪鬼的性格を持つ天使的諸力（位、主権、支配、権威、ストイケイア）であるためです。

社会の分散主権は、宇宙論的な15の法領域に分岐しているわけですが、そのひとつが「宗教」です。この「宗教」が悪鬼化した事態が、「破壊的カルト」であると言えるでしょう。

頭首権者キリストが、社会の分散主権に付与したミッションは、国家の絶対主権と同様、「世界管理者として社会の秩序と人心の安寧を維持する」という任務であるわけです。

それゆえ、「宗教」が世界管理者のミッションから離反して、「社会の秩序を破壊し人心の安寧を乱す」ようになった事態が、宗教の悪鬼化である、と捉えることができるでしょう。

世界管理者がミッションから離反する場合は、「不法の者」と化す、つまり、頭主権者キリストから委任された権威と法を濫用する露骨な形で発現して来ます。すなわち、「宗教」が、自然法、憲法、国家の公法、教会法、宇宙論的な15の法領域のそれぞれの法、人道・人権といった普遍法に対し、露骨に違反する形で発現して来るわけです。

そうであれば、どこからが「破壊的カルト」であり、どこまでが「破壊的カルト」でないか、公の判断基準を設けて、対応することが可能となります。

現経緯は、「国家」と「社会」と「教会」が、頭首権者キリストからそれぞれ領域主権を預かっているわけですが、社会の分散主権のひとつとしての「宗教」が悪鬼化した場合には、当然のことながら、もうひとりの世界管理者としての「国家」が、「剣」の権能である国家権力を行使して、宗教の悪鬼化の抑制にあたらなければならない、ということになります。

もちろん、「国家」は、自分の気に入らない宗教団体を恣意的に弾圧するために「剣」の権能を用いて良いわけではありません。根本原則として、「国家」は「社会」の自由を侵害してはならないわけですし、また、社会の分散主権のひとつとしての「宗教」は、公共空間中に場所を占める存在としての「教会」と接続する部分でもあるわけですから、「国家」が「教会」の自由を侵害することにもなりかねないわけです。

そこで、「国家」が「宗教」に対して「剣」の権能を行使するに際しては、自然法、憲法、国家の公法、人道・人権といった普遍法によって、国家権力に厳重な「縛り」をかけた上で、さらに、「破壊的カルト」を取り締まる上の明確な判断基準を設けて、慎重を期して行うべきだ、ということになります。

■902 再建主義者は今のフランスをどう見ているのか？ ただのおじさん - 2005/11/11 07:50 -

こういう事態はあらゆる国に起きうることであり、特にフランスは保守派のキリスト教でさえ取締りの対象としている法律がある国です。あの国の宗教（正確にはカルトが対象だが創価学会もその対象（ターゲット）の1つだし、保守派のキリスト教も対象（ターゲット）に入れている）政策は、個人的には中国なみの弾圧だと考えています。

何しろ私の教会では毎集会行われている招きをしたら法律に引っかかるとその法律ができた時に知って驚いたくらいです。そのような国であのような暴動がどう考えても憎悪犯罪をきっかけに起こったのですから、再建主義者はどう考えるのか私は他人事でなく知りたいのです。

なぜならば、私の属する団体ならばフランスにも宣教師を送ることなど普通に考えるからであり、さらに言えば、今、私の教会から神学校に行っている神学生がフランスに行くということも現実としてあり得、その時には出身教会として他の教会や出身団体よりもその人をきちんとサポートしなければならないと責任があります。

現実にアメリカの同じ立場の教会からはフランスへ宣教師が行っているという情報を得ています。伝道は容易ではないみたいです。

まあヨーロッパはシェーファアの時代から実質的なキリスト教信仰は廃れていて（自由主義神学やバルト神学、哲学などの影響で）、シェーファアがラブリのような活動をしたのも、そのようなヨーロッパの廃れたキリスト教信仰を見て弁証家として、伝道者としてラブリのような活動をし、その活動と連動する形でシェーファアの思想が成立していったのです。

さあ、再建主義者はこの事態をどう考えるのでしょうかね。

■ 901 憎悪犯罪強化取締法に反対する再建主義者（2） 山谷 - 2005/11/10 21:39 -

この「憎悪犯罪取締強化法」を警戒し、上院での通過を阻止するために、活発なロビー活動を展開しているのが、「カルケドン財団」です。カルケドン財団は、再建主義の父ラッシュ・ドゥーニーによって設立された、再建主義／リバータリアニズム推進のシンクタンクです。

「憎悪犯罪取締強化法」が成立すると、連邦政府は、宗教・人種・性的指向に対する憎悪を煽り立てる「ヘイトサイト」や「ヘイトグループ」を監視団体に指定し、その内容によっては起訴や処罰が可能となります。

再建主義／リバータリアニズムの中には、異端者・売神者・同性愛者の公開処刑や、有色人種に対する白色人種の遺伝的文化的優位性、人種間戦争に備えての武闘訓練、将来の奴隷制度の再興などを公然と主張する、過激な論者も存在しますので、新法成立後は、ケースによっては取締対象となる可能性があるのです。

反国家、反連邦、反成文法の立場を掲げる再建主義／リバータリアニズムにとっては、新法は、コモンマン（Common Man）としてのアメリカ人の自由を奪い取るために、悪しき連邦政府が手に入れようとしている新たな武器であり、これを「アメリカ人の自由の危機」と捉えて、非常に強い警戒感を抱いているようです。

カルケドン財団は読者に対して、「憎悪犯罪取締強化法」への反対を呼びかけ、上院議員に対するロビー活動を積極的に展開しています。

カルケドン財団は、新法反対の理由を、次のように列挙しています。

（1）合衆国憲法は、すべての国民に法の下での平等を保証しているが、新法のもとでは、特定の宗教・人種・性的指向だけが特権的保護を受けることになり、これは憲法違反である。

（2）伝統的アメリカ文化を根底で規定している「コモンロー」（Common Law）においては、犯罪は、その「行為」の内容に応じて罰されるだけであり、「動機」の内容に応じて罰されることは、あり得ない。つまり、憎悪そのものは問題とはならない。新法は、コモンローの原則を踏み越えた悪法であり、かつ、アメリカのコモンローと聖書律法とは同一であるのだから、新法は反聖書的法でもある。

（3）新法は、憲法が保証した言論と表現の自由を侵すものであり、これにより、教会はその信仰に基づいた、国家と社会に対する「抗議の声」を挙げるが出来なくなる。これは、信教の自由の危機であり、信仰の危機であり、聖書的キリスト教の危機である。

上述の主張を読みますと、聖書的キリスト教は、特定の宗教・人種・性的指向に対して憎悪を抱き、かつ、憎悪のメッセージを発することを、信仰の不可欠の一部として保持しており、かつ、そのような憎悪を公共に発信すること自体は犯罪ではなく、むしろ、法的に保護されるべき、大切な信仰の営みである、ということになるのでありましょう。

このような「信仰」を、危機に陥れることになる、今回の「憎悪犯罪取締強化法」は、再建主義者にとってまさに、「悪魔的な自然法」の典型であると言えます。

再建主義最大の論客ゲイリー・ノースの「陰謀史観」によれば、アメリカはそもそも、清教徒の植民地として、「聖書律法とコモンロー」を基盤に構築された社会であったのに、独立後の発展の途中で、悪魔的な人本主義者に国家の中枢を奪取され、その陰謀によって、「聖書律法とコモンロー」による法制度が、「悪魔的な自然法＝議会制定の成文法」による法制度に取り替えられてしまい、その結果、アメリカは非聖書的・反聖書的な国家に変貌して今日に至っている、と観るのです。

このような「史観」に立てば、今回の「憎悪犯罪取締強化法」は、18世紀末以来の人本主義者たちの連綿たる謀略の総仕上げ、という意味を持つことになるのかもしれませんが。

カルヴァンがジュネーブ市制改革でこだわった「長靴下禁止法」などは、これに比べれば、実にかわいいものです。

☐ 900 憎悪犯罪対策強化法に反対する再建主義者（1） [山谷](#) - 2005/11/10 21:37 -

アメリカ合衆国では、特定の宗教や人種に対する憎悪を動機とした、いわゆる「憎悪犯罪」（ヘイトクライム）が、連邦捜査局が把握するだけでも年間9000件以上起きています。典型的憎悪犯罪としては、白人分離主義者による、ユダヤ教会堂、黒人キリスト教会、日系人団体、公平雇用住宅局に対する襲撃・放火があります。

連邦政府は1990年代より憎悪犯罪対策に乗り出し、憎悪犯罪統計法、憎悪犯罪法、教会放火防止法などの新法を制定して、取り締まりを進めて来ました。

しかし近年は、宗教と人種に加え、同性愛への憎悪を動機とした犯罪が倍増する傾向にあります。

このため、憎悪犯罪の捜査・起訴・処罰に関わる連邦政府の権限を拡大することを企図した「憎悪犯罪取締強化法」（Local Law Enforcement Enhancement Act）が連邦議会に提案され、先月、下院を通過しました。

☐ 899 自然の問題（続） [山谷](#) - 2005/11/09 16:38 -

宗教改革の時代の人々は、よく問答形式で著述しましたが、それに倣って、自然の問題について、問答形式で考えてみました。

Q. 自然は、だれの作になるものですか？

A. 自然は、神が創造された作品で、たいへん良いものです。
（創世記1:31）

Q. 自然は、創造当初から、変わりありませんか？

A. いいえ。自然は、アダムの墮罪の影響を被った結果、虚無に服し、うめき、苦しんでいます。

(ローマ8:20)

Q. 自然の苦しみは、いつ終わりますか？

A. 自然の苦しみは、「栄光の日」に終わらせられます。そのとき、自然は、滅びへの隷属から解放され、神の子どもたちの栄光に輝く自由に参与することができます。

(ローマ8:21)

Q. 「栄光の日」は、どのようにして、実現されますか？

A. 三位一体の第二位格が受肉し、十字架にかかり、復活し、昇天し、王座に着くことにより、キリストの王権的・頭首権的支配が全宇宙に確立され、こうして、自然は是正されます。自然の是正は、初臨と再臨の間の中間時の全過程をかけて進行し、「栄光の日」に至って完成されます。

(ローマ8:22-25)

Q. 是正された自然の姿は、どのようなものですか？

A. 是正された自然の姿は、イザヤ11:1-10に描かれています。

「狼は小羊と共に宿り
 豹は子山羊と共に伏す。
 子牛は若獅子と共に育ち
 小さい子どもがそれらを導く。
 牛も熊も共に草をはみ
 その子らは共に伏し
 獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ
 幼子は蝮の巣に手を入れる。
 わたしの聖なる山においては
 何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
 水が海を覆っているように
 大地は主を知る知識で満たされる。」

Q. キリストの王権的頭首権的支配によって是正された自然は、それでもなお残酷なものですか？

A. いいえ。キリストの王権的頭首権的支配によって是正された自然は、恵みとあわれみ、愛と平和に満ちたものとなります。そこでは、力の強い者の善ではなく、共通善が善とされます。つまり、力の強い者が、弱い者に配慮し、必要であるならば、強い者が進んでその力を放棄することすら、するのです。靈感された御言葉が「強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません」と命じている通りです。

(ローマ15:1、イザヤ11:1-10)

Q. キリストの王権的頭首権的支配によって是正された自然は、今日の国家の在り方、社会の在り方を、どのように規定しますか？

A. 「栄光の日」に向かって、自然はまだなお是正の過程にあります。今日の国家と社会は、是正された自然の実を、その法と統治機構と諸制度に積極的に取り入れていく責任を、頭首権者キリストに対して負っています。

(コロサイ1:10)

Q. 是正された自然の実を取り入れた国家と社会は、どのような誤謬を退けますか？

A. 是正された自然の実を取り入れた国家と社会は、「社会ダーウィン主義」や「リバータリアニズム」のような、是正されざる残酷な自然に基づくものを、ことごとく退けます。

(詩編72:12-14)

898 自然の問題

山谷 - 2005/11/09 10:14 -

問題の焦眉は、わたしたちキリスト者が「自然」を、どう考えるのか、ということのようです。

1920年代に北米の改革派では、一般恩恵をめぐる激しい議論が戦わされました。これは、20年代末のメイチェン論争、さらに、プリンストン神学校離脱グループによるウェストミンスター神学校設立という事件とも、文脈的に関連性があります。

この20年代の北米改革派の一般恩恵論争においては、「一般恩恵肯定派」と「一般恩恵否定派」に分かれたわけですが、肯定派の代表が、カルヴァン神学校教授のラルフ・ジャンセン博士です。

ジャンセンは、「超自然」（恩恵）と「自然」を直接対峙させる二項図式は、ミュンスター千年王国派特有の二元論的異端であると主張しました。

そうしてジャンセンは、アブラハム・カイパーを引用しつつ、「無媒介の超自然的領域」（恩恵）と「一般恩恵」と「媒介としての自然領域」という三項図式で見るパラダイムこそが、伝統的な改革派神学であると論じたのです。

このジャンセンの三項図式で行きますと、「恩恵」と「自然」との間に「一般恩恵」という中間項が存在しているわけですが、この場合の「自然」は、神から純粋に自立した自然ではなくて、＜自然とは一般恩恵が働く媒介である＞という自然観であったわけです。

言い換えれば、＜神に対して自立していない自然＞ということでありましょう。つまり、キリストの王権的頭首権的統治は、自然の領域にも及んでおり、自然もまた「キリストの王国の成員」（クルマン）である、ということになるわけです。（ここで小生は、ファンルーラーの「キリスト化された世界」という言葉を思い起こすのです。キリスト高举の出来事以来、森羅万象、山川草木、木の葉の一枚、虫の一匹、砂粒ひとつに至るまで、あまねくキリストの頭首権に服し、キリストの支配が及んでいる、という世界観です。）

もちろん、アダムの墮罪の結果は、全被造物に及んでいるわけですから、「自然界の中の悪」というようなものが、存在しているわけです。これが、シェーファーの言う「残酷な自然」でありましょう。

問題は、「残酷な自然」を是正する機能を、どれに求めるか、ということです。それには、次のような考え方があると思われます：

1. 「残酷な自然」は、キリストの頭首権的支配によって、是正される。

1-A. すなわち「残酷な自然」は、キリスト高举後の創造の秩序によって、是正される。

1-B. すなわち「残酷な自然」は、キリスト高举後の天使的秩序によって、是正される。

2. 「残酷な自然」は、聖書の絶対法によって、是正される。

2-A. すなわち「残酷な自然」は、聖書の絶対的倫理規範によって、是正される。

2-B. すなわち「残酷な自然」は、聖書の司法律法によって、是正される。

上記で、1-Aを選択すれば、カイパーやファンルーラーの思想に。1-Bを選択すれば、シュ

リーアやバルトやクルマンやベルコフの思想に。2-Aを選択すれば、ヴァンティルやシェーファーの思想に。2-Bを選択すれば、ラッシュドゥーニーやノースの再建主義思想に。ということでありましょう。

■897 シェーファーは他の本でもサドについて論じていた ただのおじさん - 2005/11/08 21:23 -

その部分を引用します。

「・・・本質的には彼が、化学的な決定論者であったからである。彼は人間が、機械の部品と化するとき、たどらねばならない方向を理解していた。彼の結論は、次のようなものであった。

もし、人間が決定づけられた存在なら、そこに存在する（以上4字傍点）ものは正当である。また、生活のいっさいが機械仕掛けにすぎないのなら、そしてそれがすべてなら、道徳は実際には、価値がなくなる。道徳は、社会学上のわく組みのただの名称でしかなくなる。それは、機械の中枢にすえつけられた、社会操作の一手段となる。そうなるときに、今日の「道徳」なる語は、意味論からすれば不道徳を意味する語とすらなりうる。つまり、存在するものが、正当化されるのである。

ここで、第二の段階を指摘しておこう。ド・サドによれば、男性は女性よりも強い。自然が男性をそのように造ったからである。したがって、男性は女性にたいして、自分のしたいと思うことをする権利がある。・・・サディズム（以上5字傍点）という言葉が生まれた。しかし、われわれはここで、それが哲学上の概念と結びついている点に、注意しなければならない。サディズムは、人を傷つけるときの快楽だけを意味するのではない。それは、存在するものが正当性を主張し、また本能が力づくで命ずることは、何でも全面的に正当化されうることの意味していた。」

（フランシス・シェーファー著「理性からの逃走」47～48頁より・いのちのことは社刊行）

■896 残酷な自然について [山谷](#) - 2005/11/08 10:12 -

自然の法とサディズムの問題については、シェーファーは、『それはで如何に生きるべきか』の157-158ページで論じています。

そこでは、自然を道徳の基礎とする「自然法学派」への論駁が試みられています。

シェーファーが言いたいことは、「キリスト教的世界観は、自然を、神の創造として『良いもの』と見ると同時に、墮罪の影響を被った『残酷なもの』と見る。それゆえ、自然を道徳の基礎とする自然法は、常に、聖書の絶対法によって是正される必要がある」ということのようにです。

「残酷な自然」を法の根拠として、社会を再構築しようと目指すのが、社会ダーウィン主義に基づく「無神論的リバータリアニズム」でありましょう。

これに対して、「律法で是正された自然」を法の根拠として、社会を再構築しようと目指すのが、司法律法に基づく「キリスト教再建主義」でありましょう。

非常に興味深いことに、「無神論的リバータリアニズム」が描く社会の青写真も、「キリスト教再建主義」が描く社会の青写真も、ほぼ同一である、ということです。そうであればこそ、ラッシュドゥーニーもゲイリー・ノースも、リバータリアニズムを推進する右翼シンクタンクのスタッフとして勤務していたのでありましょう。

ところで、シェーファーの師であるコーネリアス・ヴァンティルは、神と聖書を理性能力で直接的に証明するのは不可能であるから、一方に「非聖書の原理に根拠した社会モデル」、他方に「聖書の原理に根拠した社会モデル」を置いて、どちらが社会として上手く機能するかをシミュレーションし、その結果でもって、神と聖書を間接的に証明する、という弁証方法を提唱したのです。

ところが、社会ダーウィン主義という「残酷な自然」を原理とするリバータリアニズムの社会モデルも、「律法で是正された自然」を原理とするキリスト教再建主義の社会モデルも、同一のものとなっているわけですから、その結果は、次のようなことになります：

1. 社会ダーウィン主義は、真理である

しかし、聖書啓示によれば、神は六日間で世界を創造されたのですから、この結果を受け容れることはできません。すると、

2. キリスト教再建主義は、偽りである

・・・とするしかないことになります。なぜなら、再建主義を真理としてしまうと、社会ダーウィン主義をも真理と認めることになり、それは同時に、聖書の真正性をも否定することになるからです。しかし、第三の道があります。すなわち、

3. ヴァンティルの弁証方法は、偽りである

・・・ということです。これですと、リバータリアニズムと再建主義が提案する社会モデルが何故同一なのかについて、そもそも悩む必要はない、ということになるからです。

☐ 895 聖定の教理と再建主義

[山谷](#) - 2005/11/08 09:39 -

キリスト教再建主義は、改革長老教会の「聖定の教理」を奉じるわけですが、しかし、再建主義と聖定の教理は、果たして、調和するものなのでしょうか？

簡単な思考実験をしてみましょう。

世界の全人口が、二人しかいない、と仮定します。カルヴィニストのCさんと、アルミニアン
のAさんです。

ある日CさんとAさんが夕拝に出席して、伝道師が説教するのを聞きました。（世界人口が二人だけなのに、この伝道師はどこから出て来たのか、という問題については、カインの妻の問題と同様、ここではスキップすることにします）

説教聴聞が終わると、CさんもAさんも福音を受け容れる決意を表明し、洗礼準備教育課程を終えて、晴れて受洗することとなりました。

受洗後にCさんとAさんは話し合っ、司法律法を現代社会に適用することについて合意しました。こうして、国民契約が締結され、再建主義社会が誕生することとなりました。

ところで、再建主義社会が誕生すると同時に、「聖定の教理」は崩壊してしまうことになるのです。なぜなら、聖定の教理は、「万人が救われるのはなぜか？」を説明するものではなく、「ある人が救われないのはなぜか？」を説明するものであるからです。

そこで、聖定の教理を「救う」ためには、一般召命と有効召命の概念を導入しなければならないこととなります。

すなわち、Cさんが福音を受け容れたのは、表面的であって、心底ではない（一般召命）のに対して、Aさんが福音を受け容れたのは、心底本当に受け容れたのだ（有効召命）とみなすわけです。

この場合、Cさんの回心とAさんの回心と、どちらが本物なのかは、第三者にも本人たち自身にもわからない、ということでなければなりません。なぜなら、回心が明確に判別可能なら、教会は洗礼を施さないはずでしょうし、また本人も洗礼辞退を申し出るはずでありましょうから。

ところで、回心が本物かどうか判別できない以上、教会が施す洗礼は、もはや「目に見える救いのしるし」ではなくなってしまいます。なぜなら、教会は、救われていないCさんにも、救われているAさんにも、洗礼を施したからです。

そこで、洗礼は、「目に見える救いのしるし」ではなくて、「契約共同体への加入のしるし」に過ぎないとする、「割礼に取って代った洗礼」の理解が必要になってきます。

再建主義の洗礼理解は、まさにこれです。これですと、洗礼は救いのしるしではなく、契約共同体への加入のしるしなので、明確な回心を前提とした成人洗礼にこだわる必要はなくなり、かえって、洗礼は常に「幼児洗礼」であるべきだ、という考え方を採ることになります。

さて、先ほどのCさんですが、一般召命を受けて受洗したCさんは、再建主義社会において、司法律法を完全に遵守して、善良な市民として生涯を終えたものの、天国に入ることはできません。なぜなら、救いは予知にはよらず、無条件的選びによるからです。

これに対して、先ほどのAさんですが、有効召命を受けて受洗したAさんは、再建主義社会において、司法律法に違反して、公開処刑にふされて生涯を終えたものの、天国に入ることができるのです。なぜなら、救いは予知にはよらず、無条件的選びによるからです。

そうしますと、「一般召命しか受けていなかったCさんが、なぜ、再建主義社会において、律法を遵守して、善良な市民として生きることが出来たのか？」という、新たな問題が生まれて来ることになります。

これに対して、再建主義最大の論客ゲイリー・ノースは、「呪いとしての一般恩恵」というアイデアを提案しています。つまり、全的に墮落し、かつ、選びから漏れているCさんが、律法を遵守することが出来たのは、Cさんが「呪いとしての一般恩恵」を授けられていたからにほかならない、とゲイリー・ノースは説明するのです。この「呪いとしての一般恩恵」は、滅びに定められた人々に与えられ、その人々に律法を遵守する能力を与え、そのことによって、その人々の滅びを確実なものにする、という、恐るべき呪いなのです。

894 シェーフアーは千年期前再臨論者

ただのおじさん - 2005/11/06 21:56 -

シェーフアーに詳しい牧師先生に聞いたところ、問題の本以外のシェーフアーの本も読まない、と安易にシェーフアーの例の本の評価はできないはず、ということでした。そもそも例の本は映画の台本として書かれ、その本と映画を見た上でディスカッションをすることを目的として書かれているシェーフアーの本としては特殊な位置づけにある本であり、シェーフアーの持論は他の本（「そこに存在する神」あたりが彼の主著）を読まないとは分からないはずだとも言っ

ておられました。

なお、サドと自然法に関しては関係がないとおっしゃられていました。

また、例の本の中で、概念や人名などで外されているものは、シェーファー自身が意図的に外していると歯科考えられないとおっしゃられておりました。

そのへんの事をおっしゃられた上で、再度、問題の本以外のシェーファーの本も読んだ方が、とおっしゃられました。

なお、シェーファーは千年期前再臨論者であり、その点もひょっとしてするとシェーファーの本の印象が悲観的に見える理由かもしれません。

ではこの辺でござけんよう。

☐ **893** これ以上はシェーファーの本を読まないとなちが あかないけど本は絶版 ただのおじさん - 2005/11/06 00:07 -

だって今は絶版になった本で著者が言ったか言わないかを論じなければならないんだから。

☐ **892** 答え以前の認識の問題です ただのおじさん - 2005/11/06 00:02 -

シェーファーが言っていないことを言ったので問題視しているのです。

これは解釈の違いではすまないものです。

☐ **891** 確かにネ 通りすがり 2 - 2005/11/06 00:00 -

>私は誤解があっては答えも答えにならないと考えます。

>答えというのは相手の文章（シェーファーの意図）を正しくとらえて

>こそ意味あるものとなるのです。

確かにネ。

でもね、これは富井さんに言ってあげた方が適切かと、、、

☐ **890** 答えを出すのは別段気にしていません ただのおじさん - 2005/11/05 23:56 -

もう一度私の文章を読んで欲しいです。

それでも矛盾ですか？

私は誤解があっては答えも答えにならないと考えます。

答えというのは相手の文章（シェーファーの意図）を正しくとらえてこそ意味あるものとなるのです。

☐ **889** 誤解だからです ただのおじさん - 2005/11/05 23:50 -

私を矛盾と言うのは結構ですが、山谷さんのシェーファーに対する認識が誤解だから変だと言っているだけです。

☐ **888** ちょっと横レス失礼します 通りすがり 2 - 2005/11/05 23:37 -

ただのおじさん、おっしゃっていることが矛盾です。

シェーファーはそれぞれに答を出せと促している、
だから山谷さんは彼なりの答を出したわけですよ。
それを彼個人のこの掲示板で発表しているわけですね。
山谷さんが何をどう評価し、発表しようと自由です、よね？
富井さんのように人の発言までこき下ろすわけですか？

とういわけで、山谷さんに何か問題ありますか？
どうしてそんなに絡まなくてはならないの？
私たちここを読んでいる者も、それなりに評価しつつ
読んでいるわけです。
それでいいのではございませんでしょうか？

ついでに言えば、#882で「再建主義もその一つ」と
言われるわけですが、モーセ律法を教会と社会に適用する
なんてことは、どうみても聖書から逸脱していませんか？
"one of them"であるためにはそもそも聖書にはまっていないと、、、

☐ **887** シェーファー自身は答えを出す意図はなく読者に ただのおじさん - 2005/11/05 21:33 -
答えを求めている

くどいけどもう一度繰り返すね。
いくらシェーファーが歴史と文化を語っても、それでシェーファーが読者に求めているのは
「あなたはどうか考えどう行動するのか」ということです。

>出てこない人名で言えば、アレクサンドリアのクレメンス、ルイス・デ・モリナ、アルミニ
ウス、グロチウス、アブラハム・カイパー。

こういう人の名前を出して人物像を説明したり、

>自然法、一般恩恵、摂理論、キリストの王権的頭首権的支配、領域主権。

こういう概念を出して説明することは、既にシェーファーが答えを出すべき読者に代わって自
ら答えを出している事になってしまうのです。テストの会場で先生が答えを全ての人に公言す
るのと同じで、そのようなことをする人は非常識と言われます。この本はどこまでも読者（も
ともと映画だから視聴者も）に考えさせ、答えを出させ、その答えに基づいて行動させること
が目的なのです。ゆえに、山谷氏が「出てこない」と言うのは本の目的を勘違いしているの
です。なぜなら、そのようなことをすれば、テストの会場で先生が答えを全ての人に言うよう
なことになる、本の目的を見事にぶち壊してしまうからです。領域主権やカイパーといった、概
念や名前を読者に答えとして出させて行動につなげるのがこの本の目的だからです。

奇妙な論理というのも、シェーファーがクリスチャンとして答えを出すためにクリスチャン的
な論理を使うことを想定すれば確かに奇妙かもしれませんが、例にあがった奇妙な論理は非ク
リスチャンの論理と考えればなんて事ありません。そこもシェーファーの意図を誤解している
ようですね。

☐ **886** 人間にも責任があるということ ただのおじさん - 2005/11/05 20:13 -

>自然法、一般恩恵、摂理論、キリストの王権的頭首権的支配、領域主権。

>

>出てこない人名で言えば、アレクサンドリアのクレメンス、ルイス・デ・モリナ、アルミニ

ウス、グロチウス、アブラハム・カイパー。

私は前にも言いました。今生きている人間の信仰の問題なのだと。それは神学の概念を出さなければならぬという問題じゃない。今生きている人間が答えを出す問題提起をしたのです。山谷さんの考えではクリスチャンにシェーファーの提起した問題について考えさせることはできません。その問題を考える責任がクリスチャンにはあるのです。

>自然法、一般恩恵、摂理論、キリストの王権的頭首権的支配、領域主権。

を持ち出して事足りりという性質の問題提起をシェーファーはしていません。

■885 山谷さんの見方は尊重します

ただのおじさん - 2005/11/05 19:54 -

しかしシェーファーもこの本から入ってこの手の本で一番繰り返して読んだ人間として、山谷さんの見方ではシェーファーに対して誤解を招きます。その理由は明瞭に山谷さんの解釈、神学に基づいてシェーファーを読んでいることです。そして山谷さんの見方に基づいて掲示板での文章を書いているからです。そういう態度が問題なのは、たとえば例の本の最後のエゼキエル書の引用、再建主義者から見れば、だから再建主義でなければ駄目なんだ、と再建主義の解釈、神学でとらえられてしまうでしょう。それと同様に山谷さんもこの本は悲観的で、シェーファーは問題提起だけして答えを出さない人だと評価しているでしょう。それ自体が山谷さんの神学、信仰に基づく解釈であり、シェーファーに対してあるいろいろな見方の1つにすぎないのです。私の見方は前に書いたようにシェーファーに答えを求める理由はない、というものです。そして山谷さんの見方では文章を読む人にシェーファーに対して誤解を招く恐れがあります。

クリスチャンはいろいろいて聖書の同じ箇所でもいろいろな解釈が成り立つのです。ましてや人間が書いた本で解釈があれこれ出るのは当然のことです。そもそもシェーファーのその本はクリスチャン向けだと思っていませんので、クリスチャンでないと分からないような概念や人は出さなくても構わないのです。

明日、日曜で教会に行くのでもし牧師先生に時間があったらこの件について聞いてみますよ。その先生はシェーファーの勉強会に出て勉強をした位でシェーファー周辺の人たちの思想にはとても造詣が深いし、牧師室の書棚には少なくとも1度は日本で出たシェーファーの本はほとんどあるくらいです（洋書もあると思います）。教会の本棚にもシェーファーの本はあります。ちょっくら調べてきます。何度もシェーファーについては牧師先生に聞いてきました。ここで出てくるような話題はその先生の専門分野ですから。

■884 シェーファーの悲観論

山谷 - 2005/11/05 15:17 -

再建主義者との議論を経過した後で、あらためてシェーファーの『それでは如何に生きるべきか』を読んでみますと、その悲観的なトーンに、驚かされる思いがします。

索引を調べて見ると、そこには、出てこない、ある関連語彙群があることに、気づかされます。

すなわち、自然法、一般恩恵、摂理論、キリストの王権的頭首権的支配、領域主権。

出てこない人名で言えば、アレクサンドリアのクレメンス、ルイス・デ・モリナ、アルミニウス、グロチウス、アブラハム・カイパー。

上記の概念群や人名群を十分に加味した上で「西洋文化と思想の興亡」を叙述したならば、おそらくは、シェーファーが描いたのとは相当異なるスケッチが出来上がることになるのではないのでしょうか？

つまり、恩寵と自然を対比する二項図式から絶望の現代文明へと至るラインを明瞭に描き出すためには、シェーファーは、かなりの取捨選択を行っている、ということになります。

もちろん、まったく「自然法」の概念に触れないでは、西洋文明史を述べることは不可能ですから、シェーファーは、「自然の法」という呼び方で、手短に取り扱っています。

しかし、ウェストミンスター信仰告白が言う「神の指によって二枚の板に記された律法と、人の心に記された自然法」という、律法と自然法を共に「神の永遠法」に由来するとみる見方については、シェーファーはまったく触れようとはしていません。

逆に、シェーファーは、次のような奇妙な論理を展開します。

- (1) 自然の法は、自然に根拠している。
- (2) とところで、自然とは、残酷なものである。
- (3) 残酷な自然は、存在する残酷な現象をすべて是認する。
- (4) それゆえ、マルキ・ド・サドのサディズムは、自然によって容認されることとなる。
- (5) よって、自然の法を受け入れることの論理的帰結は、サディズムとなる。

律法も自然法も、共に神に由来するとみる立場からすれば、「自然法の論理的帰結は、サディズムである」というシェーファーの主張は、どうしても首をかしげざるを得ません。

シェーファーのパラダイムを受け容れるならば、わたしたちは、サディズムの中では生きることとは出来ないのですから、自然法を捨てる決断をして、律法へと戻らなければならないことになります。そうして、律法に根拠して社会を再構築しようと目指すならば、当然のことながら、十戒の二枚の板だけでは対応し切れませんから、二枚の板に付随する「司法律法」にも、戻らなければならないことになります。

つまり、聖化の指針としての第三用法の律法でも、罪を暴露する第二用法の律法でも、こと足りず、国家と社会を規定する第一用法の律法をも、とり戻さなければならないことになるのです。

☐ 883 そうかもしれません

通りすがり - 2005/11/03 22:01 -

「ただのおじさん」さんの意見は、そうかもしれませんね。

確かに、この掲示板においても、再建主義に対しての意見が投稿される頻度もぐっと減っていたと思います。

ルーク氏とT氏の論争が勃発したことについて、私が、情報提供したことがきっかけで、もうひとたび、この掲示板が一つの役割を果たしてくれたのではないかと思います。

一時はT氏とガチンコ対決といわれた論争を繰り広げられた山谷氏が、今回は観客の立場でコメントされるということは今回の論争がより客観的なアングルを提供したといえるのではないかと思います。

ミレニアムではまだ、今回の論争について熱くなったままのようです。

しかし、ルーク氏が論争スレッドの終結にこの掲示板の存在を紹介して締めくくっておられるように、この掲示板でも、締めくくりの発言が期待される時期にきているのかもしれませんがね。

■ 882 そうでしょうね

ただのおじさん - 2005/11/03 21:35 -

一口に再建主義と言っても、行動面を見れば大きく分けて、急進的に行動していくのか穏健にことを進めようとするのであるか、の違いが再建主義者の中にもありますね。最終的には両者ともモーセ律法を教会と社会に適用することになるでしょう。両者の違いは再建を進めるスピードの違いなのでしょう。最終的な目的が同じでなければ再建主義ではないと思います。

私の今の心境としては、再建主義を危惧する必要があるとは思いますが、それほど強く再建主義を意識する必要はないと考えます。日本に限らず、教会がすべきことをして、神の教えを伝えるのにふさわしい教会が増えていけば、再建主義は問題にならなくなるということです。再建主義を意識しすぎるとかえって自分たちの方に問題が起こる可能性も考えられますし・・・。

何人ものいろいろな立場のクリスチャンと話をしていて、やはり日本の教会は生ぬるいのかな、と思うこの頃、そのような中でやはり問題意識を持っているクリスチャンが出てくるのは当然で、問題意識とその解決の見いだしかたも、いろいろなクリスチャンがいればいろいろなパターンがあって当然なのです。再建主義もその1つと考えられるのも当然のことでしょう。

私がしばらく再建主義のコメントをしなかったのは、再建主義が、神学が、弁証学が、これらのことを論じたところで、おかしな点を批判したところで、神様が喜ばれるとは思えないと考えたからです。それよりも、日常の伝道を地道に行い、1匹の羊が救われることを喜ぶ方がいいと思ったからです。言葉を多くするよりも奉仕をする方がクリスチャンの歩みにはふさわしいからです。

■ 881 再建主義の本質は

通りすがり 2 - 2005/11/03 19:41 -

ただのおじさんの言われるように、
富井氏が再建主義の中でも彼自身の人格ゆえに特殊だとして、
では私たちが彼を通して理解し得た再建主義は
モーセ律法の教会と社会への直接適用だったわけですが
これは他の再建主義者でも同じなのですか？
ただのおじさんのお友だちは性格は温厚でも
再建主義であるとする、やはりモーセ律法を
直接適用せよと信じている点では
富井氏と同じなののでしょうか？

■ 880 共通点

通りすがり - 2005/11/03 18:17 -

山谷氏は872で以下のように書いています。「「シェーファアの提起逃げ」に対しては、再建主義に行かないで、別の回答を探りあてた人たちがいます。キリスト教哲学者の稲垣久和氏は、～中略～という回答を手に入れました。

シェーファアから再建主義に入った人たちは、「シェーファアの問題提起に対しては、再建主義だけが唯一の回答であって、それを手放せば、人間は絶望するしかない」とよく主張するのですが、そんなことはないわけで、稲垣久和氏のように、ほかに有力な回答がきちんと存在し

ているのです。」

そのように、「ただのおじさん」さんも他の有力な回答を手にしたお一人なのだと理解しました。

また、横レスになりますが、「ただのおじさん」さんも真剣に再建主義に危惧の念をお持ちで、それがために本の出版なども提案されたのではないのでしょうか？

ミレニアムを見るとT氏は一転して自分の支援者へのフォローの文章を書いています。また、最近反応が減っていると、あせりの念が見受けられます。

ルーク氏とのやり取りで浮き彫りになった点は、ルーク氏の姿勢が純粋であった点ではないでしょうか？本当に先入観無く、ただ、淡々と相違点と共通点を指摘していったのみ。気持ち的にはT氏への尊敬や、できればルーク氏のいう「ニッポンキリスト教」の問題点を共有したいというような淡い期待もみえました。

しかし、T氏の側が、自分の自説に同意しないルーク氏に対して、だんだんと苛立ちや、最後にはBBSの一般人に対して、ヤクザ言葉まででてくるという始末でした。

そのへんのところに気がつかれたらなあと思います。

■879 クリスマンもいろいろな人がいるから ただのおじさん - 2005/11/03 18:09 -

私が以前、他の掲示板で意見を交わした長老派のクリスマンは、再建主義者でしたが、富井氏のサイトを紹介し、富井氏の意見を見てもらおうと、ああいう風な意見が再建主義で、彼が再建主義の代表のように思われると心外だと憤慨していました。彼は教会内で意見を言うとき以外は他者に再建主義の立場であることを言わないそうです。また、他のクリスマンが自分と意見が違おうともそれなりに相手にリスペクトをはらって対話をし、間違っても相手を裁こうという姿勢は取りません。その人と対話をしている、しばらくのあいだ彼が再建主義の立場とも気がつかなかった位、その姿勢は一貫していました。

また、何人もの再建主義の人の意見を見ましたが、細かいところまでいくとみんな意見が違って、穏健な人から過激な人までいました。

クリスマンもいろいろ、ということです。

■878 余談への余談 通りすがり 2 - 2005/11/03 17:23 -

ただのおじさんは再建主義に危惧の念を感じにはなっていないということでしょうか？
富井氏を見てると私にはどうみても危ない感じがしますけどね、、、
それとも再建主義にもいろいろあるわけですか？

■876 余談 ただのおじさん - 2005/11/03 12:19 -

この掲示板で再建主義の影響を危惧する発言をなさるのであれば、再建主義批判の本でもお書きになられたらどうでしょうか？
再建主義の本が出版されるのですから、再建主義批判の本だって出版できるはずでしょう。

■875 さらに補足

ただのおじさん - 2005/11/03 11:00 -

稲垣久和氏の文章も幾らか、本になっていない文章まで読んでいますが、氏は今生きている私たちがシェーファーの問題提起に対してどう答えるべきか考えた末に彼の主張ができあがったのだと考えられます。

稲垣久和氏も、他のクリスチャンに、自分でシェーファーの問題提起に対して考え自分なりの答えを出すべきだと主張している文章を私は読んでいます。稲垣氏自身が考え答えを出したように、他のクリスチャンもするべきだと言っているのです。

■874 補足

ただのおじさん - 2005/11/03 10:50 -

私が考える「キリスト教的世界観」とは、ウオルターズの「キリスト者の世界観」あたりに書いてあるクリスチャンのものの見方を指します。

■873 問題提起の答えは私たち1人1人が出すべきです！

ただのおじさん - 2005/11/02 23:40 -

久しぶりです。
ただのおじさんです。

私も再建主義に関心を持った人間としてその出発点はどこかと考えました。私も実はシェイファーから入って再建主義を知り、関心をもって発言もしてきた人間です。しかしヴァンティルに関心を持つ前にフレームに関心を持ち、そのうちヴァンティルの主張を知ったのですが、ヴァンティルの主張には納得できませんでした。私が思うに、ヴァンティルの主張は聖書より弁証学や神学に比重がかかりすぎているために、あくまで改革派や長老派の内部に留まる主張に過ぎず、他教派のクリスチャンに訴える力が弱い主張のように思えます。それに対してフレームの主張は一読して、ヴァンティルの主張から再建主義につながるような部分を訂正、削除しているように思います。すなわち、ヴァンティルの主張から神学色を薄め、聖書のみ原則を大切にしつつ前提主義を主張しているのです。だからこそ私は長老派の信仰の立場を取らないにもかかわらず、長老派のフレームの前提主義の立場を個人的に認めているのです。

「シェイファーの提起逃げ」に対しては、「逃げ」という表現を私はシェーファーの主張からは受けないので、なぜそのような表現を使うのか私には納得がいきません。シェーファーの問題提起に対してシェーファーが明確な答えを出さなければならなかったとは考えないからです。問題提起をすること自体だって価値があることだからです。問題を作る人は問題の答えを出す必然性はないのです。

答えを出さなければならぬのは今生きている私たちクリスチャン1人1人です。

神学者や弁証学者、キリスト教哲学者に責任をかぶせないで、自分の信仰に照し合せてシェーファーの問題提起に答えを出すべきです。

■872 日本の再建主義

[山谷](#) - 2005/11/02 17:27 -

スコットランド長老教会大会は、再建主義に対して公式の異端宣告を行い、再建主義者の聖職就任を禁止したわけですが、この事は世界のいくつかの改革長老教会の大会にも報告され、検討されて、評価がなされたようです。

日本の改革長老教会でも、この事が検討されたのかどうかは、小生は不明にして知りません。

英米の場合、まとまった人数の再建主義者が活発に活動しているため、カバーリング機関としては、それを抑制する具体的な行動なり措置なりが、必要であったわけです。

ひるがえって、日本の改革長老教会の場合は、（１）公然と活動している再建主義者の人数が少ないこと。（２）教会に健全なカルヴァン主義の神学の深い素地があること。（３）そもそも日本に英米のコモンロー個人主義のような文化が存在しないこと。以上から、再建主義について憂慮すべき事態にはなっていないようです。

もっとも、改革派の出版社から、バーンセンの本が翻訳出版されていますし、チルトンの本も自費出版に近い体裁ながら、福音系の書店で販売されていますし、再建主義最大の論客ゲイリー・ノースの翻訳書が、マルコーシュ・パブリケーションから出版もされています。こちらは、日本の福音主義神学界の重鎮である宇田進氏が序文を書いておられます（！）宇田氏は、ウェストミンスター神学校でノースの同僚であったそうです。

さらには、フルプレテリズム再建主義の谷口明法氏はクリスチャン新聞の論説委員を務めておられましたし、いのちのことば社からは、再建主義に多大な影響を与えたコーネリアス・ヴァンティルの訳書が近々出版されようとしています。

こうしたことを考えますと、再建主義が日本の福音派、特に、カルヴァンの自然法肯定の立場に疎い、非改革長老系の福音派や聖霊派に、今後も影響力を拡げ得る可能性が十分あると思われます。

これまで日本で再建主義に入ってしまった人たちを見てみますと、三つの傾向があるように思われます。

１．ヴァンティルの弟子であるフランシス・Ａ・シェーファアの「二項図式」のパラダイムによる現代文明批判に共鳴したものの、「それでは如何に生きるべきか？」という問題提起に対してシェーファアが明確に回答していないことに不満を抱き（いわゆる「シェーファアの提起逃げ」の問題）、そこから、有望な回答としての再建主義へと導かれて行った人たち。

「シェーファアの提起逃げ」に対しては、再建主義に行かないで、別の回答を探りあてた人たちがいます。キリスト教哲学者の稲垣久和氏は、シェーファアから出発して、北米に行かず、オランダのカイパー、スキルダー、ドゥーイーウェルトから「キリストの王権的頭首権的世界統治における領域主権」（つまり一般恩恵論）という回答を手に入れました。

シェーファアから再建主義に入った人たちは、「シェーファアの問題提起に対しては、再建主義だけが唯一の回答であって、それを手放せば、人間は絶望するしかない」とよく主張するのですが、そんなことはないわけで、稲垣久和氏のように、ほかに有力な回答がきちんと存在しているのです。

２．悲観的前千年期王国論に失望して、後千年期王国論へと導かれて行く中から、フルプレテリズム再建主義へと入って行った人たち。この人たちの場合、ハル・リンゼイの核戦争待望論に影響された80年代から90年代の「現状に全く希望を与えない再臨運動」の渦中であって、大いなる幻滅を経験し、そこから、再臨の教義そのものに疑問を抱くようになり、「再臨は西暦70年にすでに終わった」というフルプレテリズムのパラダイムとの衝撃的な出会いをした結果、敗北主義的人生観を清算して、前向きに生きることができるようになった、という人たちです。

３．体制崩壊期のソビエト・ロシア社会主義共和国連邦に滞在して、大いなる幻滅を味わい、「自然法によって統治する世俗的国家は根本的に間違っている」と確信するようになり、そこ

から、「自然法によって統治する世俗的国家」に代る新しいモデルを聖書から提案する再建主義に出会った人たち。この人たちの場合、たまたま滞在先が崩壊期の共産主義国であったことが、トラウマ的な経験となってしまい、「議会制定の成文法によって統治する国家は、すべて悪魔的なヒューマニズムだ」と見るようになってしまったのです。

いずれの場合も、「再建主義は最後に残った回答であり、それを手放せば、人間は絶望するしかない」と思いつめてしまっています。

恨むべきは、「提起逃げ」をしたシェーファーであり、スムーズな体制移行に失敗したゴルバチョフである、ということになるのかもしれませんが。

871 再建主義の評価

通りすがり 2 - 2005/11/01 22:16 -

すみません、下の投稿、訂正しようとしたら消えてしまいました。

通りすがりさまのおっしゃるとおり、そろそろ再建主義は改革派どうのこうのではなくて、明確な異端とした方が良いでしょうね。これ以上騙される人たちが出ないように、山谷さまにもますます情報を広めてもらえますように。

869 異端への対処方法

通りすがり - 2005/11/01 20:56 -

T氏は再建主義に反対する人々は断罪するだけで、聖書から論じようとはしないと書いている。

しかし、例えば、エホバの証人から論争を持ちかけられても、普通のクリスチャンは論争にのるべきではない。エホバの証人の文書も読むべきではない、と私は思う。エホバの証人に対しては、「あなた方は異端です。私たちは関わりたくありません。」これで十分だと思います。たとえどんなに「聖書から論じようとしなさい」といわれようと。

しかし、エホバの証人からの救出に重荷をもっておられるのなら別です。エホバの証人の誤った教えに囚われている人々を解放するために、愛をもってエホバの証人の研究をし、聖書からの議論を展開するべきでしょう。

再建主義に対しての同様のことが言えると思います。普通のクリスチャンであるならば、「私がかかわりともちません」これで十分だと思います。

しかし、山谷氏のように専門的に再建主義に論争し、勝利することのできる人がいる。これらの議論から有益な事柄を学ぶことは普通のクリスチャンでもできるでしょう。

できれば再建主義の側も、信仰の確信が無く、現在の教会に問題意識を感じてネット上をさまよっているような人をターゲットにするのではなく、本物の神学者、山谷氏（ウェイスレイ代表）や岡田氏（改革派代表）や真鍋氏（ディスペンセーション代表）などの胸をかりて公開討論会でも開くべきでしょう。

868 本来のキリスト教的世界観

[山谷](#) - 2005/10/31 10:35 -

シュトラウスのような「国家絶対論」を批判するひとたちは、「キリスト教が国家絶対論に基

盤を与えている」と言って、キリスト教を批判します。

再建主義／リバータリアニズムのような「国家解体論」を批判するひとたちは、「キリスト教が国家解体論に基盤を与えている」と言って、キリスト教を批判します。

どちらにころがっても、キリスト教が批判される宿命にあるようです。

これに対して、小生は、次のようにキリスト教を弁証すべきだと考えます。

1. 本来のキリスト教的世界観は、国家を肯定します。

キリスト教的世界観は、日本政府も、大日本帝国政府も、徳川幕府も、織豊政権も、室町幕府も、鎌倉幕府も、藤原政権も、大和朝廷も、それらすべてが、「キリストの王国の成員」であり、「頭首権者キリストに奉仕するしもべ」である、と見るのです。

そうして、もちろん、ナチスと戦ったイギリス、アメリカ、フランス、オランダ、ポーランド、ソビエトなどを「キリストの王国の成員」と見るわけですし、ナチスに組した日本、イタリア、オーストリア、クロアチアなども「キリストの王国の成員」と見るわけですし、中立を貫いたスイス、スウェーデンなども「キリストの王国の成員」と見るわけです。

2. 本来のキリスト教的世界観は、国家を批判します。

キリスト教的世界観は、国家を無条件に肯定するわけではありません。なぜなら、国家の本質は、悪鬼的天使的諸力（位、主権、支配、権威、ストイケイア）であるからです。

天使的諸力を本質とする諸国家は、キリスト高挙の出来事によって打破され、現経綸において、「頭首権者キリストに奉仕するしもべ」として、従属させられています。

しかし、その潜在的な悪鬼の本質が消滅したわけではありません。歴史の流れの中で、その悪鬼の本質が顕現して問題を引き起こすことが、たびたびあるのです。

通常、諸国家は、そうした横暴に走ることがないように、さまざまな縛りをかけられています。その縛りが、自然法であり、国際法であり、憲法であり、普遍的理念としての人道・人権であるわけです。

3. 本来のキリスト教的世界観は、基準を提示します。

キリスト教的世界観は、「国家はキリスト的である」と見ると同時に「国家は悪鬼的である」と見るわけです。これはつまり、キリスト教的世界観は、国家に対して是々非々の態度を取る、ということになります。

どういう場合に「国家を是とする」かと言えば、国家が、自然法、国際法、憲法、人道・人権に沿っている場合です。

とういう場合に「国家を非とする」かと言えば、国家が、自然法、国際法、憲法、人道・人権に違反している場合です。

4. 本来のキリスト教的世界観は、理想を提案します。

いかに鎌倉幕府が「キリストの王国の成員」であったとしても、そこには、是正すべき問題点が、いくつもあったわけです。これに対して、キリスト教的世界観は、ひとつの「理想的モデル

ル」を提案します。

それは、「国家」と「社会」と「教会」が、神に対しては自立していないが、相互に対しては自立している、という、三位一体的統治の概念図です。

「国家」は、主権領域内の人・物・場所を、処分することができます。ただし、自然法、国際法、憲法、人道・人権によって「縛り」をかけられます。かつ、国家は、社会と教会の自由を侵すことができません。

「社会」は、15に分岐した法領域のそれぞれにおいて、自由に活動することができます。ただし、それぞれの法領域の「法」と、国家の公法によって「縛り」をかけられます。かつ、社会は、国家と教会の自由を侵すことができません。

「教会」は、教会の領域において、自由に活動することができます。ただし、教会法と、国家の公法によって「縛り」をかけられます。かつ、教会は、国家と社会の自由を侵すことができません。

この「理想的モデル」において重要なのは、国民であり市民であり教会員である「個人」が、（１）国家との政治契約としての「憲法」を取り結んで、国家権力を制限すること。（２）選挙で代表者を選び、代表者が立法議会で「国家の公法」を正当に決めること、（３）国家が「憲法」と「国家の公法」に沿って活動しているかどうかを、国家と社会と教会から独立した「裁判所」が判断し、国家が常にその判断に対して服従すること、の三点であります。

このような、「国家」と「社会」と「教会」の在り方が、キリスト教世界観が提示する「理想的モデル」です。

■ 867 今のアメリカの背景 シュトラウス主義

HB - 2005/10/31 01:26 -

ローマ帝国のころから、あるいは古代以来の中東やアジアの国々でも同様に、宗教というものの本質は昔からこのようなところにあるのではないのでしょうか。欧州ではキリスト教がローマ帝国の国教となったことでこれが確立されたはずです。キリスト教がこの世での矛盾や苦痛を引き受けて最下層の民衆の心をまとめたと同時に、宇宙を支配する原理としての神、その子で王たるキリスト、神秘的な方法で人間の心に働きかけ内側から人間を動かす聖霊、といった一つの完成された世界観（国家観）を持ち（あるいは持たされ）、国家による巨大な詐欺体系を保証するものとなったのです。

甘ったるいプロテスタントの「愛の宗教」しか知らない日本人には解りにくいことでしょうが、中世ロマネスク・ゴシック美術の宝庫である南欧カタルーニャに住んでいますと、この点は非常によく解ります。「キリスト教＝支配そのもの」であったことが。（こいつに比べりゃスメラミコトの国家神道なんてチンケなもんだ。）

私が「父と子と聖霊の三位一体神」ならぬ「金力、権力、情報力の三位一体神」と語るときに、単なる茶化しで言っているわけではありません。これが総じて宗教（＝巨大カルト）の本質だと考えているからです。

ローマ帝国の延長であるバチカンがシュトラウスの宗教観に対して反対する理由は基本的に無いでしょう。彼らは最初からシュトラウスが指摘したとおりのものだったのですから。このような宗教観は別にシュトラウスが初めてではなく、一部の間抜けなインテリを除いてみんながうすうす知っていたことです。それをシュトラウスがズバリと言っただけだ。

19世紀末以来の、シyon運動、シオニズムの勃興、米帝国による虚偽と力による世界征服の開始、オプス・デイの登場とスペイン雛形国家、ナチによるユダヤ人迫害とイスラエル建国、バチカンでの第2公会議とオプス・デイの支配、冷戦構造とその崩壊、9・11対テロ世界戦争の勃発、と続く、政治・経済・宗教（力・カネ・虚構）がからまりあった現代史の裏構造（真実）を解き明かす中でこそ、シュトラウスも正しく位置付けられなければならないでしょう。

<http://asyura2.com/0505/cult2/msg/401.html>

☐ **866** 不思議なヒトです

通りすがり 2 - 2005/10/31 00:04 -

通りすがりさまのご意見にはアーメンです。
それにしましても、富井氏はやたらとリキが入ってしまいましたね。
どして、これほどに律法を弁護するのだろうか、
富井氏の精神構造に関心を持ってしまいました、

☐ **865** そうでしょう。

通りすがり - 2005/10/30 08:22 -

オーム真理教にたくさんの若者や、社会的にはかなりのエリートが流れていっていました。科学者や医者や弁護士や、高学歴な人々。

特殊な人や、もともと病的な人たちがひっかかるというか、社会全体がある意味危機的な状況にあるのかもしれない。

だからといってカルトに流れてしまわないようにという警笛をだれかがならさなければ。

山谷氏には、今後、個人的な論争相手だからというだけではなくして、社会全体の益のために、活躍をしていただきたいと願います。

☐ **864** なるほど

通りすがり 2 - 2005/10/30 08:14 -

確かにそうかも知れませんね。
私の印象として、T氏の病的な部分が露になったと思いますし、
それでもなお再建主義に行くとなると
これは赤軍派や核マル派に行くようなものでしょう。
いくら社会に問題意識を持っていたとしても
そういった運動に行く人たちはやはり特殊というか
もともと病的な人たちでしょう。
それと同じ構図になるのかなと感じます。
とすると、私たちにできることはこのような場で
情報を広く流すことでしょうか。
山谷氏の大論争はその意味で意義がありましたね。

☐ **863** 包囲陣

通りすがり - 2005/10/30 00:04 -

T氏自身に何らかの変化を期待することは不可能でしょう。

一方で、T氏や再建主義に近づこうとする人は、何らかの理由で、現状のキリスト教会に問題

意識をもっている人で、その解決の糸口をT氏や再建主義に求めると思うのです。

そこにはまさに、福音の恵みを捨てて、律法主義に回帰していったガラテヤ人たちと共通する弱さがあると思います。

ですから、攻撃の矛先をT氏に直接向けるよりも、T氏に近づこうとする人に警笛を鳴らすことのほうが効果的ではないかと思うのです。

■862 まったくアーメンです

通りすがり 2 - 2005/10/29 17:24 -

下の「摂理」、まったくもってアーメンです。
聖書を素直に読めば、このとおりですね。
しかし富井氏の特徴として、他人に耳を傾けることなく
ひたすら自身の説を、繰り返し述べるだけ。
しかも自分の誤解を省みることなく、一方的思い込みで、
やたらと感情的だから始末に悪い。
ヤクザ言葉も出ちゃうしね、、、。
ルーク氏も「学」として低級だと言っておられるが、
まったくそう思います。
再建主義ウォッチングだけでなく、
富井氏ウォッチングも要るかも、、、。
このヒト、そのうち何をし出すか、ちょっと心配。

■861 失敗ではなく、摂理（3）

[山谷](#) - 2005/10/29 15:28 -

さて、では、1947年のパレスチナにおけるイスラエル国家樹立をもって、中間時は終わった、と見るべきなのだろうか？

すべてのディスペンセーションナリストはそう信じている、と再建主義者は主張します。

しかし、そうではないのです。

なぜなら、1947年に誕生したイスラエル国家は、ダビデ王統のイエス・キリストが直接統治する神政国家ではなくて、日本やアメリカと同様の世俗国家であるからです。

世俗国家イスラエルが、回復されたユダヤ人の王国などでは全然ないことは、ラビたちすらも、認めていることではありませんか？ 超正統派のラビたちが離散の諸国を出てパレスチナに戻ろうという気がまったくないのは、「メシアが直接統治しない世俗国家は、回復された王国ではない」という神学的理解を保持しているからにほかなりません。

国家の成り立ちを規定するその国の憲法が、主権の源泉を国民にあると明記している限りにおいて、その国家は、「中間時の中間領域における天使的仲介」の存在を前提にして成り立っている国家である、ということになります。

世俗国家イスラエルは、主権者キリストが直接統治する終末論的王国とは、まったく性質を異にするものであり、国の成り立ちとしては、世俗国家イスラエルは日本や韓国や中国や台湾やアメリカの国家と、何ら変わるところがない、ということになります。

それゆえ、パレスチナに世俗国家イスラエルが存在する現状は、中間時の終わりを告げるものなどでは全然なくて、むしろ、「恵みの時」としての中間時が、今なお確固として続いている

という事実を確証するものでしかないのです。

であるとすれば、わたしたちキリスト者は、主が命じられたように、「福音の宣教につとめる」という、中間時における本分を、ひたすら果たして行くだけなのです。もちろん、「いつ、ユダヤ人の王国が回復されるのか？」という疑問は、抑えがたく浮かびあがるでしょう。しかし、それを問うてはならないのです。なぜなら、「時期については、あなたたちが関知することではない」と王国の王である主イエスご自身が明言されたからです。

パレスチナにイスラエル国家が樹立されたから、福音宣教をお休みにして、イスラエル国家を支援しよう、というような考え方は、明らかに「経緯を読み違えている」としか、言いようがありません。

■ 860 失敗ではなく、摂理（2）

[山谷](#) - 2005/10/29 15:10 -

問題は、パレスチナにおける「ユダヤ人の王国」です。これは、主イエス・キリストご自身が、ダビデ王統の王として、直接統治なさるべき主権領域です。ところが、ユダヤ人の大多数は、イエスを王とは認めていないわけですから、この主権領域は、ペンディング状態に置かれ、ユダヤ人は、ダビデ王権の直接統治下ではなく、「位・主権・支配・権威・ストイケーア」のもとでの委任統治下で管理されることとなりました。つまり、ユダヤ人は、諸国の主権の天使による分散管理下に置かれることとなったわけです。

パウロによれば、ユダヤ人がナザレのイエスにつまづいてしまったのは、ユダヤ人が悪かったから、とか、ユダヤ人が罪を犯したから、とかいうのでまったくありません。ユダヤ人が福音につまづいたのは、神の救済意志に基づく、摂理的な支配の結果であったのです。

なぜなら、もし、ユダヤ人の大多数がすぐ福音を受け容れて、地上にユダヤ人の王国が回復してしまったならば、当然のことながら、福音は、「ユダヤ人の福音」となってしまう、その内容は、イエス・キリストを信じる信仰による義と、その結果としての律法の全規定の遵守、というかたちになってしまっていたであろうからです。実際、初代教会当時のユダヤ人キリスト者共同体の福音理解は、そのようなものでした。

これだと異邦人は、キリストを信じ、神を礼拝し、自然法を遵守し、聖化の道を進むだけでは、信仰共同体に加わるには不適格ということになってしまいます。異邦人もユダヤ人と同じように、割礼を受け、安息日に労働を休み、豚やイカやタコを食べず、利子付債務契約を結ばず、そのほか生活の上のさまざまな制約を受けなければ、信仰共同体に加われなくなってしまいます。

すると、異邦人は、異邦人のままでは救われることが出来ず、異邦人はユダヤ人のようにならなければ救われない、という福音になってしまうわけです。

これでは、「すべての異邦人が救われることを望む」という、神の救済意志が実現できなくなってしまいます。

そこで、神は、摂理的な支配によって、ユダヤ人が何ら落ち度や過失がないにもかかわらず、福音につまづくように仕向けられ、その結果、福音宣教は異邦人に向かって爆発的な勢いで進むこととなり、それにより、「異邦人キリスト者共同体」が各地に誕生し、「異邦人キリスト者共同体の福音理解」が誕生することとなったのです。

この、異邦人キリスト者共同体の福音理解は、キリストを信じる信仰によって義とされた異邦人信者は、自然法（あるいはノアの七戒）に加えて、四分節規定（あるいは三分節規定）を遵

守し、かつ、それぞれの信仰共同体が定める「肉のわざのリスト」に基づく戒規に服すればよい、ということになりました。このことについては、エルサレム公会議（使徒言行録15章）において、ユダヤ人キリスト者共同体も、承認を与えました。

そのおかげで、わたしたち異邦人キリスト者は、豚やタコやイカを食べ、安息日（土曜日）に労働しつつも、キリストの救いを十全に味わい、楽しむことができるようにされているのです。

異邦人に福音が伝えられている現経緯は、ルカ福音書では「異邦人の時」と呼ばれ、また、福音につまづいているユダヤ人は、福音書において「ゲネア」と呼ばれ、さらに、律法の遵守を求めない福音が宣べ伝えられているこの時代を、パウロは「恵みの時」と呼んでいます。

神学的には、この時期は、初臨と再臨の中間に位置する「中間時」です。中間時には、天使的諸力が「国家」と「社会」の統治の委任主体となっています。その意味で、中間時は、「神の摂理的な支配」の時代です（組織神学では、天使論は摂理論の下位部門となっています）。

さらにまた、多数のユダヤ人が、福音につまづいた状態の中に置かれ、ユダヤ人の王国がペンディング（一時留保）状態とされ、ダビデ王統のキリストの直接統治下ではなく、諸国の主権の天使を介しての間接統治下に置かれている、という意味でも、現経緯は、「神の摂理的な支配」の時代だと言えるわけです。

■ 859 失敗ではなく、摂理（1）

[山谷](#) - 2005/10/29 14:55 -

富井氏は、「ディスペンセーションナリズムは、人類の歴史を『神の試行錯誤の連続』と見る。様々な時代において神は人間をテストし、人間は神の期待にこたえられずに失敗した、とする」と書いておられます。

が、これは、大いなる誤解です。

歴史は、「神の摂理的な支配」によって、終末における救いの完成に向かって、着実に進んでいるのです。それが「救済史」であり、歴史の主体は、人間ではなく、摂理的に統治しておられる神なのです。

歴史の主体が人間であって、その人間が失敗している、というような世界観は、むしろ、「ヒューマニズムが現代社会を支配している」とか、社会を「神本主義と人本主義」の二項図式で見ようとする、再建主義特有の誤謬ではないかと思います。再建主義の歴史観は、まさに、「失敗史観」ではないでしょうか。

「神の摂理的な支配」については、パウロが、ローマ書9章から11章で詳細に論じています。そこでパウロが扱っているのは、「ナザレのイエスがユダヤ人の救世主としておいでになったのにもかかわらず、なぜ、大部分のユダヤ人は、イエスにつまづいたのか？」という問題でした。

この問題は、初代教会にとって重大な神学的挑戦であり、初代教会は、この問題をどうしても越えて行かなければならなかったわけです。そこでパウロが出した答えが、「神の摂理的な支配」でありました。

本来なら、ユダヤ人の大多数が、ナザレのイエスを約束の救世主として受け入れることにより、ダビデ王権が統治するユダヤ人の王国が、パレスチナにすみやかに樹立されるはずであり

ました。イエスの弟子たちもそれを期待しており、使徒言行録冒頭で、弟子たちは主に「ユダヤ人の王国を復興されるのは、今ですか？」と訊ねています。

これに対して主は、「父が、神としての権威によって、その時を定めておられるのであって、その時期は、あなたがたの関知するところではない」と、お答えになっています（使徒1:7）。

では、ユダヤ人の王国が回復されるのが、すぐでないとしたら、弟子たちは、いったい、何をすべきなのか？ これに対して、主は「福音を宣教しなさい。それが、あなたがたのなすべきことだ」と命令されたわけです。

そう命じておいて、主は弟子たちを残し、オリーブ山頂から天に昇り、神の右において、王座に着かれました。この「着座」によって、主イエス・キリストの王権的・頭首権的統治が、全宇宙に対して確立されたのです（キリスト高举）。

その意味で、いまや全宇宙が、キリストの王国となっているわけですが、キリストの王権的統治は、現経緯においては「教会」と「国家」と「社会」という、三つの領域主権に分岐して行われているわけです。「教会」の領域においては「キリストのからだなる教会」が委任の主体となり、「国家」と「社会」の領域においては「位・主権・支配・権威・ストイケイア」が委任の主体となっています。

■858 富井氏の独り相撲再開

通りすがり 2 - 2005/10/29 11:58 -

富井氏はまたまた独り相撲状態。

どうも彼はおつむが空燃焼する方ですね。

勝負はついているのに・・・。よほど悔しいのでしょう。

山谷氏とルーク氏のお陰で再建主義の問題点も分かってきましたが、

このヒトの精神状態もかなり危なそう。

ルーク氏の指摘どおり、相当に病的。

■857 「十戒の二枚の板」と「贖罪の蓋」の問題

[山谷](#) - 2005/10/25 12:55 -

小論「『十戒の二枚の板』と『贖罪の蓋』の問題について」をアップロードしました。ご笑覧くだされば幸いです。

[「『十戒の二枚の板』と『贖罪の蓋』の問題について」](#)

■855 再建主義と改革長老教会

[山谷](#) - 2005/10/25 09:50 -

「われわれこそ改革長老教会の正統中の正統である」というのが再建主義者の常套句であるわけですが、しかし、改革長老教会と再建主義との間には、下記のような大きなパラダイムの相違が存在しています。

改革長老教会は、一般恩恵を肯定。

再建主義思潮は、一般恩恵を否定。

改革長老教会は、成文法による世俗国家の統治を肯定。

再建主義思潮は、成文法による世俗国家の統治を否定。

改革長老教会は、自然法を肯定。

再建主義思潮は、自然法を否定。

改革長老教会は、司法律法の現代社会への適用を否定。
再建主義思潮は、司法律法の現代社会への適用を肯定。

改革長老教会は、三項図式の世界観に立脚。
再建主義思潮は、二項図式の世界観に立脚。

改革長老教会は、アミレニアリズムを肯定。
再建主義思潮は、アミレニアリズムを否定。

上記の重大な相違があるわけです。再建主義と改革長老教会が違うことは、ウェストミンスター信仰告白を読んでも、カルヴァンの『キリスト教綱要』や『申命記講解説教』を読んでも、さらに、明らかになるばかりです。

ところが、再建主義者は、「再建主義はポストミレニアリズムだから、改革長老教会の正統だ」と主張するわけです。これはおかしいことで、ポストミレニアリズム・イクオール・改革長老教会にはならないわけですし、さらにまた、ポストミレニアリズム・イクオール・セオノミーということにもならないわけです。

再建主義者が正統性の最後の根拠として挙げるのが、カルヴァンの『申命記講解説教集』であるわけですが、その説教集にしても、カルヴァンは、「今日、われわれは、ユダヤ人が持っていたような王国や領域主権を得ようと求むべきでないし、ダビデの世俗的王国のようなものを求むべきでもない」と明言しています。

これですと、カルヴァンによって再建主義が否定されてしまうことになりますから、ゲイリー・ノースは苦肉の策として、この箇所に脚注を打って、「カルヴァンはジュネーブ市制改革を通して司法律法の適用を行おうとしていたことを銘記すべきだ」と弁解に努めています。

しかし、これにしてもおかしいことで、カルヴァンのジュネーブ市政改革は、司法律法の社会への適用などではなかったのです。それをよく表しているのが1547年5月の「長靴下事件」です。

ジュネーブ市議会は、市民に対してドレスコードを議会立法で定め、「長靴下」の着用を軽佻浮薄であるとして禁止していたのですが、軍司令官ベランが「長靴下着用許可」を議会に提案し、議会は一旦はこれを許可しました。

ところが、カルヴァンは、教会と議会が決定したドレスコードを簡単に変更すべきではないと反論して、許可は覆されてしまい、ふたたび、長靴下は禁止となったのです。

今日のキリスト者であるわたしたちから見たら、議会制定の成文法によって長靴下を禁止するなど、まったくナンセンスで、これなどまさに「悪魔的自然法」の典型ではないか、とさえ、思ってしまう。しかし、当時のジュネーブのキリスト者市民は、長靴下がキリスト者の聖化の指針にも、善良な市民の社会生活にも、そぐわないと考えたのでした。

しかし、いかにそれがナンセンスだとしても、カルヴァンが、議会制定の成文法によって長靴下を禁止することに賛成した、というのは、不動の歴史的事実ですし、また、旧約律法のどこをどう決疑論的に適用しても絶対に長靴下の禁止など出てこようはずがないわけですから、カルヴァンは再建主義の敵でこそありはすれ、再建主義の正統性の根拠には、決してなり得ないわけです。

□854 再建主義対改革派 通りすがり - 2005/10/22 15:32 -

現在ミレニアムは改革派・長老派の立場で「神学ではなく聖書」といった風潮を批判している。

いかにも再建主義が改革・長老派と同じ立ち位置にいるという雰囲気をかもし出しているが、それは再建主義の隠れ蓑だ。

改革・長老派の多くが無千年王国説を支持しており、再建主義の立場ではそれは異端と退けられてしまうだろう。

□853 完全勝利 通りすがり - 2005/10/22 01:39 -

山谷氏がルーク氏に完全勝利を宣言した。それは、山谷氏自身が富井氏に完全勝利しておられるからだ。

富井氏は自ら論戦から身を引いた、そして、他者に山谷氏は何も意見していないという。負け犬の姿だ。

しかし、ルーク氏は山谷氏の掲示板を大変参考になる評価して、論争を締めくくっている。

かくして再建主義は自らの主張に同意しない者にことごとく異端宣告をなす、カルト的な小集団として孤立している。

再建主義以外から、自らの信仰の確信がないからと言って近づこうとする人に警告しよう。

あなたも、再建主義にならなければ異端宣告されるのだ！！

□852 国家による課税は盗みである？ [山谷](#) - 2005/10/21 17:11 -

目下における国家財政の窮迫、そして、財政均衡を目指した抜本的な税制改革。これが、郵政改革後の争点としてまず第一に上がって来る、わが国の政治的課題であるわけです。

国家と税制の問題について、再建主義者は、どのように考えているのでしょうか？

再建主義の父ラッシュドゥーニーは、その代表的著作である『聖書律法綱領』において、次のような考え方を示しています。

(1) 創世記における「地を支配せよ」との命令は、集団としての人間ではなく、個人としての人間に与えられたものである。

(2) それゆえ、個人は、その天与のあらゆる才能と資質を発揮して、神の意志であるところの「地の支配」を実現しなければならない。この個人の企てに対して、集団（国家と公共機関）は、いかなる規制や妨害も加えてはならない。

(3) 旧約律法に根拠しない、所得税・相続税・法人税・消費税・その他の諸税は、「神の法」に反した、悪魔の法であり、国家が個人に対して行うそれらの課税は、個人が企てる「地の支配」の実現の妨害であり、また、「盗みの罪」であると言える。

(4) キリスト者は、来るべき再建主義社会において、旧約律法が規定する十分の一税以外の、あらゆる税制を廃止することを目指すべきである。

上記の主張で注目すべきは、「地を支配せよ」との命令が「個人」に対して与えられたものである、とする、再建主義の基本的な創造理解です。

この創造理解によりますと、宇宙論的な15の法領域の分岐した「領域主権」(地)を支配するというミッションは、あくまで、個人が、個々人の努力によって達成すべきミッションである、ということになります。

このことから、ホームスクーリングのような考え方が出て来ることになるわけです。なぜなら、「教育」「学問」という法領域を支配するのは、どこまでも「個人」であるべきであって、「集団」(国家と公共機関)は、いかなる関与もすべきでない、ということになるからです。ましてや、公教育が、「神の法に違反する悪魔的な税制」によって盗まれた「個人の財産」で運営されているとなれば、これは、神の意志に対する反逆である、とすら、みなされるわけです。

こうして、再建主義の政治的アジェンダには、「公教育の廃止」「所得税・相続税・法人税・消費税の廃止」といった目標が上がってくるわけです。

それにしましても、もし、本当に、「地の支配」が個人に対して命じられているのだとしたら、個人が支配すべき領域は「教育」や「学問」だけにとどまらないはずですよ。

論理的帰結として、「安全保障」「治安維持」「防衛」といった領域も、個人が支配しなければならないことになります。

アメリカの再建主義者の場合は、リバータリアンと共に、「個々人の銃器による自己防衛」を主張し、個人に対する武器使用規制の撤廃を言うわけです。

こうして、再建主義社会は、万人が銃を所持して闘争する、という自然状態へと回帰して行くことになるわけです。

☐ 851 晩年のカルヴァンは本当に転向したのか？ 山谷 - 2005/10/20 14:48 -

「カルヴァンは自然法を尊重していた」ということを、われわれが指摘すると、再建主義者が決まって反論に出して来るのが、カルヴァン晩年の『申命記講解説教集』です。

この説教集において、カルヴァンは自らの転向を明らかにし、「司法律法を現代の政府にも適用すべきこと」を主張した、とされているのです。

しかし、本当にそんなことを、カルヴァンは『申命記講解説教集』で述べているのでしょうか？

カルヴァンは『申命記講解説教集』の説教第155編「祝福のための分離」において、こう言っています。

「ユダヤ人は、王国が繁栄し、外敵を打倒し、神が味方して戦われたので、かしらとして立てられた。

今日、われわれは、ユダヤ人が持っていたような王国や領域主権を得ようと求むべきでない

し、ダビデの世俗的王国のようなものを求めるべきでもない。

われわれにとっては、イエス・キリストが与えられたこと、また、われわれがキリストと共に統治するということだけで、十分なのだ。なぜなら、われらの王キリストは、ご自分の王国において、われらを繁栄させてくださるからである。断言するが、われらは、かしらなる神の御子のみもとで、王の系統を引く祭司とされていることだけで、十分とすべきなのである」

上記を読めば、まったく誤解のしようがないほど明確なのですが、カルヴァンは「今日において司法律法を適用した政府を樹立しようと企ててはならない」と言っているのです。

「ユダヤ人の王国の消滅と共に司法律法も消滅した」とする、ウェストミンスター信仰告白19:4の次の言明は、上記カルヴァンの言葉と見事に一致しています。

「政治体としてのイスラエルの民に、神は様々な司法律法を与えたが、それはこの民族の国家と共に消滅し、今や、その持つ一般的公正さ(General Equity)が要求し得る以上のことは何も義務づけはしない。」

われわれキリスト者は、カルヴァンが言うように、今日、キリストの王権的頭首権的な世界支配において「王の系統を引く祭司」とされているわけですが、その事実をもってして、キリスト者は十分満足すべきなのだ、とカルヴァンは断言しています。

それでは、キリスト者が「王の系統を引く祭司」であるという事実をもってなお飽き足らず、キリスト者は「国家の絶対主権」としての領域主権に進み出て征服し、司法律法を適用した政府を現代に再建すべきだ、ということになるのだろうか？

カルヴァンが、そういう意味での「王の系統を引く祭司」をまったく考えていなかったことは明白です。なぜなら、その前段でカルヴァンは、「今日、われわれは、ユダヤ人が持っていたような王国や領域主権を得ようと求めるべきでないし、ダビデの世俗的王国のようなものを求めるべきでもない」と述べているのですから。

かくして再建主義者は、ガラテヤ書を改訂し、ウェストミンスター信仰告白を改訂してもまだ足りず、カルヴァンの『申命記講解説教集』をも改訂しなければならないのです。

■ 850 神の法は、律法だけか？

[山谷](#) - 2005/10/20 10:34 -

富井氏は、スコットランド長老教会すらも、すでに「異端」と断定しているようです。

しかし、それなら、なぜ、ウェストミンスター信仰告白をも「異端」と言わないのか？ なぜなら、信仰告白は、司法律法の廃棄を明言するからです。

さらにまた、なぜ、カルヴァンをも「異端」と言わないのか？ なぜなら、“内なる人”さまがご指摘の通り、カルヴァンは、自然法を重んじるからです。

スコットランド長老教会大会決議に対して、富井氏は反駁書をしたためていますが、その中で、氏はこう言っています。

「神の法からの自由を宣言する宗教は、キリスト教ではなく、明らかに異端であり、サタン教である」

ここに、再建主義者の根本的な誤解があります。

伝統的キリスト教は、単に「律法からの自由」を宣言しているのであって、けっして「神の法からの自由」を宣言しているわけではないのです。

「神の法」には、万人の心に記された自然法がありますし、また、宇宙論的な15の法領域に分歧した、それぞれの法があります。

さらにまた、国家が定める「国家の公法」は、（１）中間時におけるキリストの王権的頭首権的支配のエージェントである「国家」が、（２）その定める「公法」を自然法に根拠し・自然法によって批判し・自然法によって制限するかぎりにおいて、キリスト者が正当に遵守すべきものであるのです。

そうであればこそ、カルヴァンは、「異教の国家が定める公法もまた、キリスト者が遵守すべき正当な法である」と言ったのではありませんか？

それゆえ、伝統的キリスト教は、「キリスト者は、国際法を遵守し、国家の公法を遵守し、教会法を遵守し、交通規則を遵守し、学校の規則を遵守し、野球のルールブックを遵守し、就業規則を遵守すべきだ」と言うことができるのだし、また、実際に、そのように言うのです。そして、それは、司法律法廃棄の立場と、何の矛盾もありはしないのです。

これに対して、再建主義者は、「キリスト者は、国際法を破り、国家の公法を破り、教会法を破り、交通規則を破り、学校の規則を破り、野球のルールブックを破り、就業規則を破るべきだ」と言おうとするのでしょうか？ 再建主義者が言うように、この宇宙に存在する「神の法」は「律法」だけであって、それ以外の法はすべて悪魔の法であると言うなら、再建主義者はそうすべきなのではありませんか？

しかし、R. J. ラッシュドゥーニーは、「イギリスのコモンローと律法は同じものだ」と明言しています。つまり、この宇宙には、「律法」以外にも「神の法」が存在していることを、当の再建主義の創始者自身が認めてしまっているのです。

■ 849 両者の議論を読んで

内なる人 - 2005/10/19 23:48 -

僕は穏健なカルヴァン主義ですけど聖化論はウェスレーの考えに近いのでルーク氏の考えに共感しました。

それともう一つ思ったのは再建主義の方はセオノミーとポストミレを認めないクリスチャンは山谷兄弟が危惧しますように異端視してしまうのかなと。

もしそうでしたら、再建主義者のかたは現代のクリスチャンのみならずアウグスティヌスやルター、ウェスレーも同様に異端とみなさなければならないでしょう。カルヴァンも山谷兄弟が述べられているように自然法を主張していますから。

それからやはり聖書を何の先入観なしに読みますとポストミレではなくてプレ・ミレになってしまいます。ですのでやはり山谷兄弟が述べられているように律法の問題だけでなく、終末論の問題からも聖書の聖典のリストの削除もしくは追加をせざるをえなくなるでしょう。

おそらく再建主義のかたは最初はそこまでなくて聖書＋教理＆神学でいくと思いますが。それでも聖書のみというプロテスタントの伝統の一つに反しますが。

■848 ガラテヤ書の律法は、律法主義者の律法か？ [山谷](#) - 2005/10/19 15:40 -

＜ガラテヤ書の律法とは、当時の律法主義者の律法を言うのであって、モーセ律法のことではない＞と再建主義者は頑強に主張し、それについてあくまで納得できないドクター・ルークを、再建主義者は異端として断罪するに至りました。

しかし、ドクター・ルークが異端とされてしまうのであれば、スコットランド長老教会もまた、再建主義者によって異端宣告されなければならないことになります。なぜなら、スコットランド長老教会は、再建主義問題を扱った2001年9月の大会決議の第3節2項において、次のように言明しているからです：

「使徒パウロの手紙であるガラテヤ書は、聖書の中で、再建主義を完全に論駁する文書である」

「ガラテヤ3:10が述べる文脈においては、律法全体、つまり、シナイ山で与えられた律法全体が意味されているのは、明白である」

「＜律法の書＞（ガラテヤ3:10）という表現は、申命記においては、申命記それ自体を指しており、それには、儀式律法と司法律法が共に含まれる。これが、割礼規定を義務づけるところの＜すべての律法＞なのであり、キリスト者は、それから自由にされているのである」

つまり、再建主義者は、改革長老教会に対してまず異端宣告を行わないことには、ドクター・ルークを異端宣告することなど、順序の問題としてとても出来ない、ということになるわけです。

■847 再建主義とリバータリアニズム（続き） [山谷](#) - 2005/10/19 14:19 -

それにしましても、創造論に基づくキリスト教再建主義と、社会ダーウィニズムに基づく世俗的リバータリアニズムが、その思い描く社会の姿について、面白いほどまでに一致してしまうというのは、いったい、どういうことなのでしょう？

再建主義に対して多大な影響を与えたキリスト教弁証学者のコーネリアス・ヴァンティルは、神と聖書について直接的証明が不可能であるゆえに、一方に「聖書の原理に根拠した社会モデル」を、他方に「世俗的原理に根拠した社会モデル」を置いて、どちらが上手く社会として機能するかを比較検討し、その結果をもって、神と聖書を間接的に証明することが出来る、と唱えたのでした。

ところが、再建主義が描く「聖書の原理に根拠した社会モデル」と、リバータリアニズムが描く「世俗的原理に根拠した社会モデル」とが、ほぼ同じようなものとして一致してしまうわけですから、まったく皮肉なことです。これをもって、ヴァンティル弁証学が崩壊してしまう、ということになりかねないわけです。

■846 再建主義とリバータリアニズム [山谷](#) - 2005/10/19 14:16 -

ハリケーン「カタリナ」の襲来で未曾有の災害を被った合衆国南部地域ですが、リバータリアニズムの推進者、リユー・ロックウェルは、次のような論評をしています（要約）：

「今回のハリケーンで、国家と公共機関は、自然災害に対して無力であることが判明したが、それどころか、国家と公共機関は、被害をより悪化させる存在でしかないことが、明白になった。国家と公共機関を解消して、すべての市民が、自己責任で自然災害のリスクに万全の備え

をするようになれば、今回のような被害には、至らなかったであろう。」

ハリケーン災害については、連邦政府の責任を追及する世論が高まっているわけですが、なんと、リバータリアンは、「国家が存在しなければ、ハリケーン災害は、もっと小さくて済んだはずだ」という、180度ひっくり返った主張をしているわけです。まったく、空いた口がふさがりません。

リバータリアニズム推進者として、反国家・反戦・反社会主義を掲げるリュウ・ロックウェルとは、どのような人物なのでしょう。

リュウ・ロックウェルは、リバータリアニズムの中心的な担い手であるマーレー・ロスバードから新自由主義の社会思想を学び、アラバマ州オーバーンに「ミーゼス研究所」を創設しました。現在、その所長をつとめています。研究所の名称は、フリードリヒ・フォン・ハイエクと共に、リバータリアンに多大な影響を与えているオーストリア学派の経済学者、ルードウィヒ・エドラー・フォン・ミーゼスから取られたものです。リュウ・ロックウェルの師であり、「ミーゼス研究所」における同僚でもあるマーレー・ロスバードは、今日、ミーゼスの主要な継承者とみなされています。

リュウ・ロックウェルはまた、カリフォルニア州バーリンガムの「リバータリアン研究センター」の副所長でもあります。

興味深いのは、キリスト教再建主義の最大の論客、ゲイリー・ノースが、この「リバータリアン研究センター」の公式ウェブサイトである「リュウ・ロックウェル・ドットコム」

(<http://www.lewrockwell.com/>) の主要な執筆陣のひとりであることです。「リュウ・ロックウェル・ドットコム」には、「ゲイリー・ノース・アーカイヴ」(<http://www.lewrockwell.com/north/north-arch.html>) が用意されています。

ゲイリー・ノースは、1960年代にフリードリヒ・フォン・ハイエク、マーレー・ロスバード、レナード・E・リードら「新自由主義者」の著書を読んで、自分もリバータリアンになったこと、また、60年代と70年代を通じて、リバータリアニズム推進団体である「フォルカー財団」と「経済教育財団」でスタッフとして働いたこと、さらにまた、自分の師であり義父であり再建主義の元祖であるルーサス・ジョン・ラッシュドゥーニーもまた、リバータリアニズムの推進団体「人文学研究所」にスタッフとして勤務していたことを、述懐しています。

以上を考え合わせれば、再建主義は、リバータリアニズムと表裏一体の関係にある、あるいは、リバータリアニズムの数ある学派のひとつが再建主義である、と言うことが出来るでしょう。

ハイエク、ミーゼス、ロスバードらの「リバータリアニズム」については、新自由主義・新保守主義の社会思想として、現日本のアカデミズムにおいても一部に支持する動きが見られます。近年各方面で主張されている「政府の規模縮小」「公共機関の民営化」「経済規制の撤廃」「市場原理至上主義」「株主至上主義」「医療・年金・福祉の規模縮小」「自己責任」といった流れを見ますと、日本でもリバータリアニズムは今後さらに影響力を増して行くであろうと思われます。そうしますと、リバータリアニズムと密接な関係にある再建主義へと転向して来るキリスト者も、これから少なからず増えて来るのではないかと憂慮されます。

当掲示板としましては、今後、再建主義とリバータリアニズムの関わりについて、特に注意を払ってウォッチングしていきたいと思ひます。

今回のドクター・ルークと富井氏との議論は、ヘブライ書とガラテヤ書をめぐる 이슈が中心でありました。

今回の議論をウォッチングしながら、新約聖書正典の中でガラテヤ書が占める位置の重要性というものを、小生は改めて痛感させられました。

歴史に「もし」は、ありませんが、もし正典からガラテヤ書が抜け落ちていたら、と思うと、ゾッとさせられます。

富井氏は、「モーセ律法が、恵みの契約の一部として、＜いのちの法＞として与えられた」と議論の中で言明しておられました。

しかし、パウロは、ガラテヤ書で、「律法とは何か？」という命題に対して、次のように答えています。すなわち：

- (1) 律法は、キリストが来られる時まで (3:19)
- (2) 違反を明らかにするために (3:19)
- (3) 後から付け足しとして、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定され (3:19-20)
- (4) 人間を生かすことが出来ず (3:21)
- (5) キリストを信じる信仰が啓示されるまで、人間を罪の支配下に閉じ込め (3:22)
- (6) キリストを信じる信仰の出現をもって、その役割を終える (3:25)

上記について考えるなら、(1)は「時間の限界」を示します。つまり、律法が、旧約時代と同じように、現代においても司法律法として機能し続ける、と言うのであれば、「時間の限界」を言うガラテヤ書を改訂しなければなりません。

(2)は、「目的の限界」を示します。つまり、律法が、呪うのではなく、いのちを与える、と言うのであれば、やはり、「目的の限界」を言うガラテヤ書を改訂しなければなりません。

(3)は、律法が、恵みの契約とは、まったく異なることを示します。なぜなら、恵みの契約においては、神が単独で行動し、単独で契約起草者となったのに対して、モーセ律法の場合は、神が単独で行動することが出来ず、多数の天使的諸力を共同起草者としなければならなかったからです (3:20)。つまり、律法も恵みの契約の一部である、と主張するためには、ガラテヤ3:20を全面的に改訂して、「神は天使と仲介者の関与を全く経ずに、単独で律法を授与された」と書き改めなければならないことになります。

(4)は、「能力の限界」を示します。律法が、人を生かすことが出来る＜いのちの法＞であると言うためには、ガラテヤ3:21もまた、削除しなければならないことになります。

(5)と(6)は、「経綸的な限界」を示します。律法の経綸上の役割は、キリストが到来するまでであって、キリスト到来後の新経綸においては、律法は、その役割を終えているのです。律法の役割は、キリスト到来前も到来後も何ら変化がない、と主張するためには、キリスト到来前と到来後の経綸を明確に区別して議論しているガラテヤ3:19-25の部分を全文削除した上で、救済史の展開において、キリストの出来事は、たいした意味がない、あるいは、ほとんど意味がない、としなければなりません。

つまり、再建主義が再建主義の主張を貫き通すためには、ウェストミンスター信仰告白を改訂するだけでは全然足りず、ガラテヤ書をも改訂するか、あるいは、新約聖書正典からガラテヤ書をそっくり削除するかしなければならぬ、ということです。

神学的には、正典リストは、今なお開かれており、ルターもカルヴァンも、正典リストそのも

のは絶対不可侵とは視ておらず、実際に批判的検討を加えており、いくつかの文書を除外する可能性すら、示唆していました。

こうした先人たちにならい、自分の信じるところに従って孤高の道を行く、というのも、再建主義の今後の一つの選択肢でありましょう。

844 ついに異端宣告

通りすがり 2 - 2005/10/17 17:03 -

838で通りすがりさまの予言どおりの結末。
ドクター・ルークは自由主義神学で毒されており、
人間の知恵は恐るべしと断罪。
しかし今回の議論展開で明確に再建主義が見えました。

843 外野席から見た感想

[山谷](#) - 2005/10/17 12:18 -

わたしの感想では、ドクター・ルーク側の完全勝利だと思いました。

レビ系祭司制がメルキゼデク系祭司制によって置き換えられたのだから、律法も置き換えられた、という論点は、再建主義に明白に終止符を打つものです。

十戒の二枚の板と、それを覆う「贖いの蓋」についての議論も出ていましたが、これは、次のように考えられます。

1. 十戒の二枚の板は、自然法と共通部分であり、自然法に「唯一神信仰」「偶像崇拜禁止」「安息日遵守」を加えたものが、十戒である。
2. 十戒を覆う「蓋」は、十戒に付け加えられた「祭儀律法」と「司法律法」と「全宇宙的呪いの執行リスト」であり、その本質は、呪いの執行者としての「ケルビム」（悪鬼的天使的諸力）である。ケルビムによる呪いを回避するには、イスラエルは、犠牲の血によるあがないを必要とした。
3. キリストの十字架と復活によって、「ケルビム」は打破され、「祭儀律法」と「司法律法」と「全宇宙的呪いの執行リスト」は、廃棄された。

使徒言行録を見ると、キリスト者共同体は、異邦人信徒に対して、自然法の遵守に加えて、「売春の禁止」「偶像礼拝の禁止」「血を食べることの禁止」「屠殺しない食肉の禁止」の「四分節規定」を命じています。これは、キリスト者の聖化の指針であるわけですが、キリスト者共同体は、その<解き・また・つなぐ>権能にもとづいて、「四分節規定」を柔軟に運用し、後に、血を食べることの禁止を除外した「三分節規定」に移行しました。聖書写本によっては、使徒言行録第15章に三分節規定が掲載されているのは、このことを反映しています。

後世のキリスト者共同体は、飲酒・喫煙・賭博・麻薬の禁止を、キリスト者の聖化の指針に新たに加えました。ですから、四分節規定が、今日では、拡大されている、ということができでしょう。いずれにせよ、これは、自然法の遵守を土台として、その上で、キリスト者のあるべき生き方を規定している、という方法です。

再建主義が言うように、自然法も教会法も全廃して、またふたたび旧約律法を据える、というのは、新約聖書も教会史も無視した暴論です。

富井氏は、追い詰められて、ウェストミンスター信仰告白を引き合いに出して、再建主義の神学的正統性を装おうとしていました。

しかし、ウェストミンスターは、キリスト者の聖化の指針としての十戒の今日的意義を認めているに過ぎません。

司法律法を現代社会に適用することについては、ウェストミンスター19:4で、次のように、明白に否定されています。

「政治体としてのイスラエルの民に、神は様々な司法律法を与えたが、それはこの民族の国家と共に消滅し、今や、その持つ一般的公正さ(General Equity)が要求し得る以上のことは何も義務づけはしない。」

イスラエル王国の消滅と共に、司法律法も消滅した、と、信仰告白は明言しています。つまり、ウェストミンスターは「司法律法廃棄論」なのです。

なお、ウェストミンスターは、律法が、今日の司法の判断に対して、一般的公正さ(General Equity)を要求する、と述べています。これは、司法官の良心の判断で裁きをつける「衡平法」(Equity)における「善悪正邪の法感覚」を述べているのであって、聖書律法や慣習法の決疑論的適用によって判例法を作り出す「コモン・ロー」(Common Law)とは、何の関わりもありません。

不文法である慣習法の決疑論的適用で新たな判例法を積み重ねて行く「コモン・ロー」に対して、司法官の良心に基づく判断と大陸の自然法の導入によって形成されて来た成文法が「衡平法」です。

そうしますと、ウェストミンスター信仰告白は、「司法律法の廃棄を明言し、かつ、議会制定の成文法・大陸の自然法の神学的正統性を擁護している」ということになります。

このウェストミンスターに拠って、スコットランド長老教会は、再建主義に対して異端宣告を行ったわけです。

つまり、ウェストミンスターを引き合いに出すなら、再建主義は、異端宣告を受けるほか、ないわけです。

841 怖くなってきました 通りすぎり - 2005/10/17 06:58 -

富井氏はルーク氏の総括に対して「でも勝手にああゆ〜総括ってちょっと乱暴だね。人をシーラカンスのように言いなさんな。」だんだん自がでてきて、かなり、ガラの悪い論調になってきました。

840 しめくくり 通りすぎり - 2005/10/16 12:20 -

ルーク氏は富井氏への尊敬の感謝もおりませながら、しっかりと批判点を明確にし、実に見事に論争終結のしめくくりをしておられます。

839 実況中継 通りすぎり - 2005/10/15 04:11 -

終息宣言にもかかわらず、相手を理解しようとせず、自分の論点を繰り返そうとする富井氏に

ルークはあきれ、汗をかき、涙しながら、くりかえし同じ論点を伝えようとしています。

■838 富井氏の次の手は（予想） 通りすがり - 2005/10/14 23:35 -

ルーク氏への異端宣告や、サイエンティスト的態度について「ヒューマニズムに毒されている。」などの表現でしょうか？

■837 見切ったようですね。 通りすがり - 2005/10/14 22:48 -

ルーク氏は富井氏の論点を見切ったようですね。
事実上の終息宣言のような表現がされています。

再建主義の誤りを浮かびあがらせるためにこのような方法もあったのですね。がっぷり四つに組まず、かわし技といったところでしょうか？

山谷さんは今回は観客の立場ですが、どんな心境でいらっしゃいますか？

やっぱり、選手になって、泥をかけあいたいですか？

■836 律法と自然法 [山谷](#) - 2005/10/14 09:07 -

新約聖書が、ガラテヤ書をはじめとして、明確に律法の廃棄を述べているにもかかわらず、なぜ、再建主義者は、＜現経緯における司法律法としての旧約律法の有効性＞を、延々と擁護し続けるのでしょうか？

その理由は、再建主義者が、自然法を「悪魔の法」と見ていることにあります。

通常のキリスト者であれば、律法が廃棄されても、社会においては自然法が有効に機能しているわけですから、何も問題は起こりません。自然法は、改革派の信仰告白が言うように、「神の指によって記された」わけですから、自然法によって統治する世俗的政府には、神学的正統性があるわけです。

ところが、自然法は悪魔の法であるとする再建主義者にとっては、律法が廃棄されてしまうと、社会は悪魔の法によってのみ支配された状態となり、国家と社会の法領域における「キリストの王国」が、事実上消滅してしまうことになるわけです。再建主義者にとっては、自然法によって統治する世俗的政府は、悪魔的政府であるわけですから、これは、大問題であるわけです。

つまり、律法が立てば、キリストの王国が立つし、律法が廃棄されたら、悪魔の王国が立つ、という、二元論的思考に陥っているわけです。

これは、＜自然法によって統治する世俗的政府は、中間時の中間領域におけるキリストの王権的支配のエージェントである＞という世界観のパラダイムを、再建主義が取っていないために起きる、論理的帰結です。

本当の 이슈 は、＜律法は、いのちを与えるか、与えないか＞にあるのではなく（これは聖書を読めば結論は一目瞭然です）、むしろ、再建主義が「律法と自然法を相互排他的に捉えている」という点にこそ、真の問題があるわけです。

835 律法についての若干の問題

[山谷](#) - 2005/10/13 15:18 -

ドクター・ルークと富井氏の議論は、＜律法は、いのちを与えるか、与えないか＞が、目下の争点となっているようです。

新約聖書でパウロは、律法の問題を論じていますが、それらを読むと、次のようなことがわかります。

- (1) 律法は信仰に基づいていない。ガラテヤ1:12
- (2) 律法を行う者は律法によって生きるに過ぎず、信仰によって生きることにはならない。ガラテヤ1:12
- (3) 律法の行いによる者は、すべて、のろいの下にある。ガラテヤ1:10
- (4) 律法には、人を生かす力がない。ガラテヤ1:21
- (5) 律法は、違反を促す目的のために、あとから加えられたものである。ガラテヤ1:19
- (6) 律法が存続するのは、キリストが到来する時までである。ガラテヤ1:19
- (7) キリストを信じる者は、もはや律法のもとにはいない。ガラテヤ1:25
- (8) 聖霊に導かれる信者は、もはや律法のもとにはいない。ガラテヤ5:18
- (9) キリストに結ばれた者は、律法から解放されている。ローマ7:2,6
- (10) キリストに結ばれた者は、律法によってではなく、御霊によって、神に仕える。ローマ7:6
- (11) キリストは十字架によって、律法を廃棄した。エフェソ2:15
- (12) 律法は、正しい人のために定められたのではなく、不法な者のために定められた。テモテ1:9

以上の聖句にもとづいて、「律法は廃棄された」とわたしたちが言うと、すかさず、再建主義者は、反論するのです。「律法が廃棄されたら、キリスト者は無法に陥り、あらゆる乱行をするようになるのは必定である」

しかし、そうした問いかけに対して、パウロは、こう答えています：

わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。なぜなら、肉の欲するところは御霊に反し、御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして、二つのものは互いに相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、することができないようになる。もし、あなたがたが御霊に導かれるなら、律法の下にはいない。

その上で、パウロは、「肉のわざのリスト」と、それに対立する「御霊の実のリスト」を提示しています。(ガラテヤ5:16-24)

すると、再建主義者は、こう反論して来るのです。「律法が廃棄されたら、キリスト者にとっ

て、すべてがやってもよいことになってしまうではないか。律法が廃棄されたら、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽等々は、すべて、キリスト者がやってもよいことになってしまうではないか」

しかし、そうでしょうか？

律法が廃棄されたとしても、肉のわざは、やはり、肉のわざであることには、変わりがないのではありませんか？

なぜなら、肉の思いは、御霊の思いに反し、肉の欲するところは、御霊の欲するところに反するのですから。（ガラテヤ5:17）

果たして、律法が廃棄されたからといって、御霊は突然御心をお変えになって、不品行を求め、欲し、喜び、わたしたちに、不品行をすることを、しきりに推奨するようになるのでしょうか？ そんなことは、ありえません。御霊は、御霊だからです。

律法が廃棄されたからといって、御霊は突然御心をお変えになって、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽等々を、「すばらしいこと、賞賛すべきこと、徳のあること、美しいこと、美しいこと」として、しきりにわたしたちに促して、それらをするようにと励まされるようになるのでしょうか？

そんなことは、ありえません。なぜなら、御霊の思いは、永遠に不変であるからです。

律法が廃棄されても、御霊は、その思いを変えることは、なさらないのです。そうであるなら、律法が廃棄されても、依然として「肉のわざ」は「肉のわざ」なのです。そうして、キリスト者は、御霊によって歩むことによって、肉の欲を満たす生き方ではなく、御霊の実を結ぶ生き方をするのです。

もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もうではないか！（ガラテヤ5:25）

834 援護射撃

山谷 - 2005/10/12 16:52 -

ドクター・ルークへの援護射撃として、小論「『ディスペンセーションナリズムの問題点』を反駁する」をアップしました。

ご笑覧くだされば幸いです。

<http://makotoyamaya.at.infoseek.co.jp/dispensationalism.html>

833 新論争について

山谷 - 2005/10/08 15:12 -

読ませていただきました。ドクター・ルークと富井氏の議論、今後も関心をもってウォッチングさせていただきたいと思います。

ウォッチマン・ニー全集を愛読する小生としては、もちろん、ドクター・ルークのほうを応援させていただくことになります。

キングダム・フェロシシップBBSのスレッドで、富井氏が「山谷は質問に答えなかった」と書いておられますが、当時、小生としては、ICFで場を借りて、きっちり答えさせていただいたつ

もりであります。

小生がどう回答したか、興味のある方は、次のリンク先のログNo.27994と27995をお読みくだされば幸いです。

http://www.salvos.com/makotoyamaya/debate_at_icf.html

□ 831 情報提供

通りすがり - 2005/10/08 12:29 -

今、富井さんと山谷さんの論争について論じているサイトを見つけましたよ。

<http://www.kingdomfellowship.com/frame.html>

□ 830 リバタリアニズムと再建主義

[山谷](#) - 2005/09/29 17:51 -

再建主義陣営が、けっして一枚岩ではなく、その内部が、「フルプレテリズム再建主義」「パーシャルプレテリズム再建主義」「二契約論再建主義」「非二契約論再建主義」「信条主義的再建主義」「非信条主義的再建主義」「コモン・ロー再建主義」「家父長制的再建主義」と、さまざまな立場に分かれているように、リバタリアニズムもまた、その論者・系統によって、さまざまな立場が存在しているようです。

リバタリアニズム全体に共通するのは、政府の規模の縮小、経済規制の撤廃と自由放任主義（レッセフェール）、所得税・相続税・法人税の廃止、夜警国家、コモン・ロー的個人主義、家父長制の尊重／家父長的政治、といったところでしょうか。

再建主義にも、穏健派と過激派があるように、リバタリアニズムにも、穏健派と過激派があるようです。過激なリバタリアニズム論者によっては、刑法を含むあらゆる成文法・議会制定法の廃止、犯罪被害者個人による「同害反復」に基づく犯罪者への私刑の実行、個人の武器携行の規制撤廃、等を唱える人もいます。

これですと、アメリカ南部の極右派／ミリシアの主張や、コモン・ロー再建主義の主張に、かなり近づいて来ます。

再建主義最大の論客ゲイリー・ノースは、ハイエクのリバタリアニズムを「社会ダーウィニズムに根拠する」ゆえに、退けています。そうして、「身体の所有権」からスタートして論理を構築するリバタリアニズムには、「身体の所有権」から「私有財産の所有権」へと展開する「接続部分」に、論理的な弱点がある、と批判しているようです。つまり、「身体の所有権」を根拠に「私有財産の所有権」を言おうとすると、身体・労働・商品価値・財産価値を論じなければならないところが、従来のリバタリアニズムの弱点だ、と、ノースは見ているわけです。

そこで、ノースは、「身体の所有権」から論理を構築するのではなく、「私有財産の不可侵」を命じる「旧約律法」から論理を構築することによって、より厳密なリバタリアニズムを唱えることが可能になる、と考えているようです。

つまり、私有財産の神聖不可侵を、「身体の所有権」を土台とするのではなく、「旧約律法」を土台として主張するのが、再建主義的リバタリアニズムの本質である、ということになります。

再建主義的リバタリアニズムは、国家の役割を「夜警国家」と見ている点、また、あらゆる

経済規制の撤廃、成文法の撤廃、自由放任経済（レッセフェール）、所得税と相続税と法人税の廃止を政治的アジェンダに掲げている点では、再建主義リバータリアニズムは、他のリバータリアニズムと同じでありましょう。

■ 829 リバータリアニズムと再建主義と日本の行く道 山谷 - 2005/09/20 19:03 -

さて、日本においては、コモンロー的な法文化や法制度というものが、歴史的にこれまでまったく存在して来なかったわけですから、「コモンロー再建主義」の方面から＜再建主義＞が侵入して勢力を伸ばすという状況は、今後100年、200年を考えたとしても、なかなか考えにくいわけです。

ところが、ハイエクの提唱するような自由主義、あるいは、リバータリアニズムだったら、どうでしょう？

社会主義国家に対抗するために、福祉国家路線を採用して来た先進諸国の多くは、日本も含めて、巨額の財政赤字・財政破綻に直面していて、いまや、ケインズ経済学的政策から、ハイエク経済学的政策へと、転換途上にあるわけです。

公立の福祉施設や病院の閉鎖、相続税の廃止、といった、いくつかの先進国が実際に進んでいる方向は、まさに、それでしょう。

そうしますと、新保守主義思想・新自由主義思想である「リバータリアニズム」の方面から＜再建主義＞が日本に侵入してくる、という状況。これは、考えて見ても、あながち、あり得ないことではない、と思われまふ。

つい先日の衆議院議員選挙は、ある意味で、「大きな政府」か「小さな政府」かという、今後のわが国のグランドデザインを選択する選挙であったわけです。結果は、国民の多数が、「小さな政府」を選んだ、ということでありました。

もちろん、「小さな政府」イコール、リバータリアニズムが言うような「夜警国家＋自由放任経済」をすぐさま意味する、ということには、なりません。

しかし、ベクトルで表すとすれば、日本国民の選択は、ケインズ方向であるよりは、ハイエク方向であったことになります。

わたしたちは、今後、「再建主義」が描くような社会に進んで行くのか。それとも、従来のような「福祉国家」を、高い税金を払うことを覚悟した上で、維持して行くのか。それとも、ヨーロッパのように、「小さな政府」と「大きな政府」の中間に行く「社会民主主義的政策とNGOの協働」という道を進むのか。

なかなか、目が離せない状況になってきました。

■ 828 コモンローと再建主義について 山谷 - 2005/09/20 18:42 -

当掲示板では、過去に、コモンロー再建主義について、何度か論じたことがありました。ご参考までに、ログをご紹介します。

過去ログ

No.755 イギリスのコモン・ローは聖書律法であるか！？

- No.759 「コモン・ロー運動」なるもの（1）
- No.761 「コモン・ロー運動」なるもの（2）
- No.764 コモン・ロー再建主義
- No.766 コモン・ロー再建主義とブリティッシュ・イスラエル主義

827 リバタリアニズムと再建主義（2）

[山谷](#) - 2005/09/20 18:34 -

再建主義最大の論客であるゲイリー・ノースは、1960年代にリバタリアニズムの思想家フリードリヒ・ハイエク、マーレー・ロスバード、レナード・E・リードらの論文を読んで、自分もリバタリアンとなったことを、次のリンクで述懐しています。ただし、ゲイリー・ノースは、自分のリバタリアニズムがカルヴァン主義に立脚しているのに対して、ハイエクのそれは、社会ダーウィン主義に立脚している、という相違点を指摘しています。

[「本物のリバタリアニズム」](#) 参照

上記リンクで、ゲイリー・ノースは、次のような興味深い事実を回顧しています：

リバタリアンのレナード・E・リードは、夜警国家と自由放任経済（レッセフェール）を目指して啓蒙活動を進める「経済教育財団」の創設者です。

この「経済教育財団」のスタッフであったF. A. ハーパーは、リードと路線対立し、1960年代におけるリバタリアニズムの最大の資金団体「フォルカー財団」に移籍しますが、ハーパーは「フォルカー財団」からも追い出されてしまい、自分で「人文学研究所」を設立することになりました。この「人文学研究所」には、再建主義の父であるR. J. ラッシュドゥーニーが、スタッフとして雇われていました。

これに対して、ゲイリー・ノースは、1963年の夏まで「フォルカー財団」に勤務しており、1971年には「経済教育財団」のスタッフとして働き始めました。

・・・ということです。

R. J. ラッシュドゥーニーとその女婿であるゲイリー・ノースは、再建主義思潮における路線対立、特に、合衆国憲法の正統性の是非を巡る対立で袂を分かったことが知られていますが、上記の流れを見ますと、再建主義上の神学的な路線対立がまた、リバタリアニズムの学問的な路線対立とも重なっていたらしい、という興味深い事実が浮かび上がって来ます。

ところで、米国南部に見られる「コモンロー再建主義」の主張は、議会制定の成文法を廃止して、コモンローの決疑論的適用を復活させることによって、「アメリカ人の自由を取り戻す」という運動であったわけです。そうして、R. J. ラッシュドゥーニーは、「コモンローは聖書律法と同一である」と言明することによって、キリスト教再建主義がコモンロー再建主義と密接な関係にあることを示唆したわけです。

現代社会におけるコモンローの復権は、リバタリアンの元祖ハイエクの主張の中心点でもあるわけですし、R. J. ラッシュドゥーニーもゲイリー・ノースも、それぞれリバタリアニズム推進団体で活動していたという経歴があるわけですから、＜キリスト教再建主義とコモンロー再建主義とリバタリアニズムは、表裏一体である＞と言ってもよい、ということになるでしょう。

826 リバタリアニズムと再建主義（1）

[山谷](#) - 2005/09/20 18:02 -

米国政治の話題で最近耳にする機会が多くなってきた「リバータリアニズム」ですが、その主義主張を読みますと、再建主義が掲げる政治的目標と、驚くほど似通っていることがわかります。

次にリンクしたのは、リバータリアニズムの主張を20項目に整理した表です。これですと、妊娠中絶の是非をめぐる（5）のイシュー以外は、ほぼ、再建主義と同一なのではないか、と思われま。特に、（18）と（19）の「湾岸戦争への反対」「イラク戦争への反対」は、日本の再建主義サイト「ミレニアム」の主張と同一であり、ますます、リバータリアニズムと再建主義の類似性を確信させます。

[「リバータリアン保守思想20の特色」](#) 参照

リバータリアニズムと再建主義の関わりについては、再建主義思想家のひとり、アンドリュー・サンドリンが、次のリンクで論評しています。サンドリンは、リバータリアニズムには、「キリスト教をベースとする有神論的リバータリアニズム」と、「社会ダーウィン主義をベースとする無神論的リバータリアニズム」の二種類あることを認めた上で、＜キリスト教的リバータリアニズム＞が払うべき注意点は、（1）自由の概念と服従の概念のバランスをいかに取るか、（2）独裁者をいかに回避するか、（3）奴隷制をいかに回避するか、の三点であると見ているようです。

[「キリスト教リバータリアニズムの思想」](#) 参照

825 略語解説

[山谷](#) - 2005/07/26 16:07 -

投資資金の運用による宣教責任(MRTI)
Mission Responsibility Through Investment

説教壇による宣教責任(MRTP)
Mission Responsibility Through Pulpit

市民的不服従による宣教責任(MRTCD)
Mission Responsibility Through Civil Disobedience

政治参加による宣教責任(MRTPP)
Mission Responsibility Through Political Participation

消費行動による宣教責任(MRTCA)
Mission Responsibility Through Consumer Action

824 レスの続き3

[山谷](#) - 2005/07/26 15:59 -

さて、米長老教会が2004年の総会で決定した「投資資金の運用による宣教責任」(MRTI)は、上述の手段や方法を考え合わせた場合、どう捉えることができるのでしょうか？

1. 教会は、なによりもまず、説教壇において、人権抑圧を行う国家と多国籍企業を批判することにより、「抵抗権」を行使すべきでありましょう。これに類するものとして、手紙、回覧状、掲示物、印刷物、出版物、放送、インターネット、さらに、街頭でのデモンストレーションなどによる「預言者の声」の発信があります。―「説教壇による宣教責任」(MRTP)

2. 次に、個々のキリスト者が、そのような国家と多国籍企業に対して、非暴力不服従による

「抵抗権」を行使すべきでありましょう。

2-A. キリスト者が、当該国の国民・市民である場合には、納税や公法や企業内規定の遵守など、国民・市民としての義務を忠実に履行しつつも、「人権抑圧に関わる命令」という一点において不服従を貫き、場合によっては殉教も辞さない、という抵抗手段を取るようになります。たとえば、キリスト者が軍人・警察官・行政官・会社員である場合； 軍人として、無防備の市民に対する発砲命令を拒否する。警官として、裁判所の令状を得ない家宅の搜索命令を拒否する。行政官として、適法な手続きを経ないで行われる財産処分命令の執行を拒否する。会社員として、企業における違法な業務命令の遂行を拒否する。等々が考えられます。このような非暴力不服従は、ほとんどの場合、国の定める法の条文とも、法の基本的精神とも、企業の法令順守（コンプライアンス）の方針とも、合致しているのですから、キリスト者が不法を行うということにはあたらず、むしろ、キリスト者の非暴力不服従を通して、国家と社会こそが「不法の者」であることが浮かび上がる図式になります。 — 「市民的不服従による宣教責任」(MRTCD)

2-B. キリスト者が、他国の国民・市民である場合には、自国の政府が、人権抑圧を行う国家に対し、外交的圧力を加えて是正させるよう求める、「政治参加による抵抗権の行使」があります。これには、政党の活動、議員に対するロビー活動、政権与党を選ぶための選挙権の行使が含まれます。 — 「政治参加による宣教責任」(MRTPP)

2-C. また、人権抑圧を行う国家を利する活動を行っている多国籍企業に対しては、その企業が提供する製品やサービスを買わない、利用しないという、「消費行動による抵抗権の行使」があります。 — 「消費行動による宣教責任」(MRTCA)

3. さて、米長老教会の「投資資金の運用による宣教責任」(MRTI)は、(a) 信仰の共同体である教会が、(b) その全体意志（総会決議）として、(c) 教会職員の年金運用資金を、(d) 該当企業への投資から引き上げることににより、(e) 該当国と該当企業に対して圧力を加え、(f) 教会の「預言者的声」としてのメッセージを発信する、というものです。

これですと、教会財産であるところの年金運用資金を、教会総会が定めた規則なり方針なりにもとづいて、自由かつ合法的に処分する、ということであるわけです。

公会議が教会法を定め、教会法が教会内の人・物・時・場所の運用手続きを規定し、教会がその規定を適正に執行する限りにおいては、教会は、教会の領域主権を踏み越えてはいないのです。また、教会の資金を市場に投資するということは、教会が、国法に規定された「一法人格」として、つまり、国家の絶対主権と社会の分散主権に従属する主体としての「個人」として行う行為であるわけですが、企業への投資にしても、企業からの投資資金の引き上げにしても、あくまで市場の法や国の経済関連の法を遵守して行われるわけですから、「個人」としての教会は、国家の絶対主権も、社会の分散主権も、侵害してはいません。

つまり、「投資資金の運用による宣教責任」は、国家と社会に対して圧力となるけれども、国家と社会の領域主権を侵害するような不法性は存しない、と考えるべきでありましょう。

823 レスの続き2

[山谷](#) - 2005/07/25 11:46 -

初代教会においては、信仰の共同体には、カリスマ（恵みの賜物）として「預言」が与えられていました。しかし、新約聖書が執筆されつつあった段階、つまり、パウロやペテロが手ずから書簡を記していた時期においては、教会はまだ、「世界管理者（諸権力）の露骨な悪鬼化」、つまり、ローマ帝国官憲による皇帝礼拝強要に端を発した大迫害という事態には、直面しておりませんでした。

それゆえ、パウロもペテロも、諸権力に対して相当に楽観的な態度を取っており、パウロは「良心のために、国家権力に服従しなさい」と勧めており、ペテロは「キリストのために、人間の建てた諸制度に服従しなさい」と勧めているものの、キリスト者の抵抗権の行使については、何ら言及していないのです。

「諸権力の露骨な悪鬼化」が開始された時期以降、信仰の共同体は、キリスト者の抵抗権を、いのちをかけて行使しなければならなくなったわけですが、その方法には、次のようなものがありました。

1. 説教壇において説教者が「預言者的声」を発する
2. 個々のキリスト者が官憲に対して「非暴力不服従」で抵抗する
3. 信仰の共同体が「全体的意志」を決定し、その決定事項を執行する

(1) は、信仰の共同体の成員が集まる礼拝の場において、説教者が、国家と社会の悪鬼化に抗議する発言を、説教の中で行う、ということです。「生活の座」の観点からヨハネの黙示録を読むならば、黙示録は、迫害激化の状況下の小アジアの諸教会で語られたであろう、当時の説教の性格と内容を、うかがい知らせてくれるものと言えるでしょう。

(2) は、個々のキリスト者が、官憲から皇帝礼拝を強要される具体的場面において、非暴力不服従を貫き、場合によっては殉教も辞さない、ということです。これは、キリスト者が、国家と社会に対して、納税や諸法令・諸慣習の遵守を忠実に果たしつつも、皇帝礼拝という唯一点においては不服従を貫く、ということです。

(3) は、信仰の共同体が、共同体の意志決定として、ある行為を是とした場合に、その行為を、キリスト者に奨励し、また、命じるということです。また、共同体の意志決定として、ある行為を否とした場合に、その決定に従わないキリスト者に対して戒規を執行し、場合によっては、聖餐の交わりから除外することです。古代においては、どの共同体も、皇帝礼拝という行為を否としたわけです。歴史においては、必ずしもそうでない場合があります。たとえば、日本では、礼拝における宮城遥拝や、キリスト者による伊勢神宮・靖国神社への参拝を、「市民的義務であって、皇帝礼拝・偶像礼拝に該当しない」という判断を、信仰の共同体が下したわけです。つまり、ある行為が戒規にあたるか・あたらないかを、教会が共同体として意志決定しているわけであり、戒規を執行するか・しないかによって、信仰の共同体としての抵抗権を行使するか・しないかが、分かれてくることになるわけです。

822 レスの続き1

[山谷](#) - 2005/07/25 11:39 -

次に、教会が、国家と社会に対して抵抗権を行使する場合、どのような方法があるのかを、考えてみることにしましょう。

旧約時代においては、国家と社会が、社会的弱者の保護を怠ったり、人権を抑圧したりした場合に、預言者が、神の代弁者として、国家と社会に対して抗議を行いました。これが、「預言者的声」です。

サムエルやエリヤやエリシャが擁していた「預言者学校」（預言者のともがら）が、信仰の共同体であったと捉えることが出来るなら、「預言者的声」は、ある程度の共同体的性格を帯びていたと認めることが出来ることになります。

しかし、そう捉えないなら、「預言者的声」は、一個人による抵抗権の行使にとどまるでしょう。

ただし、一個人の発した「預言者的声」が、その後、文書として編纂され、預言書として体裁を整えられ、信仰の共同体の礼拝において朗読されるべき「聖なる文書群」の中に加えられた経緯を考えるなら、一個人の発した「預言者的声」が、時代の経過と共に共同体的性格を帯びようになって行ったことは、認めなければならないでしょう。

この「預言者的声」を根拠とすれば、教会という信仰の共同体は、国家と社会に対して、同様な「預言者的声」を発することが出来ることになります。つまり、社会的弱者の擁護と保護を神から命ぜられている世界管理者としての「国家と社会」が、その任務を怠った場合、あるいは、悪鬼化して人権抑圧を行うようになった場合に、教会が、信仰の共同体として、地上における神の代弁者として、国家と社会への抗議の声を公然と上げる、ということになります。

■ 821 theologiaさまへ

[山谷](#) - 2005/07/19 17:24 -

まず、「地の塩ファンド」というアイデアを実行している、米国長老教会（PCUSA）の考え方や方法を、ご紹介したいと思います。

米国長老教会は、伝道基金として110億円、教職及び職員の健保・年金基金として620億円、併せて730億円を資金運用しています。

この巨額の教会資金を、キリスト教倫理に基く社会的公正の基準に従って、正しく運用することが、教会の説明責任として求められているわけです。これを、「投資資金の運用による宣教責任」（MRTI）と呼んでいます。

その方法は、多国籍企業が、深刻な人権抑圧（アパルトヘイトや大量虐殺）が行われている国において、人権抑圧を行う政府を利する企業活動を行っている場合、米国長老教会は、その多国籍企業から、投資資金を段階的に引き上げる、というものです。

米国長老教会は、これまで、こうした投資資金の引き上げを、南アフリカ、スーダン、インドネシアでの人権抑圧に関連して実施しており、成果を挙げて来たという実績があります。

米国長老教会2004年度総会は、パレスチナのイスラエル占領地域（ガザ、ヨルダン川西岸、エルサレム東部地区）において、イスラエル政府がパレスチナ住民に対する人権抑圧を行っていることを憂慮し、パレスチナのアラブ人キリスト者と連帯する立場に立ち、「平和へのロードマップ」に沿った双方の武力行使の即時停止・人権抑圧の中止・占領地域の返還・パレスチナの独立が速やかに達成されることを企図して、「投資資金の運用による宣教責任」（MRTI）を実施することを決議しました。

これにより、米国長老教会は2006年6月までに、イスラエルで企業活動をしている多国籍企業をリストアップし、その企業活動の内容を分析し、パレスチナにおける人権抑圧の状況に利する活動を行っていると判断された企業に対しては、米国長老教会及び賛同するエキュメニカルな諸教会の投資資金が、段階的に引き上げられて行くこととなります。

■ 820 抵抗権の行使者

theologia - 2005/07/15 17:57 -

お久しぶりにご意見させていただきます。

地域教会の自主独立運営に慣れ親しんでいる私は、815号において山谷様が提案された

「ヘッジファンドの悪鬼化を抑制する『地の塩としての教会ファンド』」という発想が新鮮であると同時に違和感も感じました。山谷様の論拠を考察する中で、違和感を感じるにいたった私なりの論点を記させていただきます。

809号において山谷様は、私の考察を土台として「国家権力が『世界管理者としてのミッション』と『墮罪後の安全保障者としてのミッション』とに背く場合には、キリスト者の抵抗権の理由が発生する」と、抵抗権へと話を進めておられます。個々人の「キリスト者の抵抗権」(強調は付け足し)に関して2つの発生理由が存在する、という山谷様のご意見に同感します。しかし810号においてその抵抗権が「世界の第三項としての<教会>は、キリスト者の抵抗権を行使して、悪鬼化するグローバル経済に対して抗議し…」(強調は付け足し)という共同体としての抵抗権へと変化して語られるときに、「抵抗権を行使することが神に許される行使者の資格」の議論がなされていないことに違和感を感じました。

別の言い方をいたしますと、国家・社会・教会の領域主権が混同し、結果的に山谷様が望めない「教会による神政政治(?)」を匂わせることになっているような感じがしたわけです。

やはりここらへんの議論をするためには山谷様も幾度か引用されておられる「領域主権論」、「有機体としての教会」あたりの思想を展開しないといけないかな、と感じました。

私個人としては専門外の領域なので、ご意見するのもお恥ずかしい限りです。示唆に富む文章活動に感謝いたします。

<http://theology.exblog.jp/>

[「再建主義大論争を回顧する」へ](#)